ロ 1[illegible]3
15
1

門 口 號15 巻1

此集義和書は前ニ板行シ
ありしく世間ニ流布せし
ゆへ也京板田舎ニ有之
故今又洛陽之書肆ニ
於て古板求こゝろく
重ねて出かし此二冊之所

ロ13

ゑ文なかう

集義和書巻第一

書簡之一

一　来書略　博学ありて人に孝弟忠信の道を教る

ゐる人の中に不孝不忠なるもの(?)はいかなる事にて候や

返書略　武士の武芸に達しあるひは人に勝ことを知りて

いへとも武功なき者あり無芸にても武功ある人多し

兵法もしらぬ無芸の者にもおとるところあり学問の道も同

およそ文知仁勇は文武の徳なり礼楽弓馬書数は文武

の芸なり生付仁厚なる人は文学せずして孝行忠節なるもの

なり生付勇強なる人は武芸をしらずしても勝負の利をしるも

のなりされはとて文武の芸をすてゝよき道理なけれども古

の人は其身に道を行ふ事全からぬは文才に器用なる

されハ学問をすゝめ文道を教へて人民の心をやはらけ
とゝのへ風俗をうるはしくし兵士に勇氣あらしむへき人も
また武藝にも器用なるものハ弓馬をよくしつゝあるひハ兵
法を教へて人民の筋骨をかたくしやう能をとけしむ
國の武威をつよくせんとすへし是主將の心をもそへしむへく
並を定むへき道なりそのちからなくして孝行忠節なる氣質
の義なり道を知らさる勇者ハ血氣の勇といふものなり凡人
の徳を達し才を長することハ文武にあらすんハ成かたし今の世
の人ハ文の末をしりて本に達することをしらす武にかたより
其天の扶を生することを知らす今ハ足のいとまありのよ
を務めて角あるものゝ外をとりて形あるもの先にとらはれて
また大なる文才に器用なるものハ徳行のうへにもよく徳行よき

人ハ文才拙きといへとも智聰明なる生付なれハ行ハ
やさしく行篤實なるものハ智よりもまさりて君子ハ其
者を見て倣らんことを求め小人ハ人のみしりをあらはしても
らはしてその義をしらすしてもよく世にすくれ徳をしる
き人多し才ありてハ稱すへし徳ありてハ好むへし
一 本書略今の世に学問をする人ハ天下国家を政道に和
つくり萬民を思ふに多く學者に仕を定めさせいかに国家をよく
世に仕へむくいや
四書略の学問をすれとも利欲をはなれすしてはしるもの
智術のみなり実ハ道を求くして大人ハ立廢あまたなり
其今の世の愚なる人ハ可惜思ハす今の世の生まれの
如きを開く小さくひて世間の人ハ利発なる故なり世の是

利害に泥りぬまことの道徳には遠ざかるものにはあらず而に
貴賤我ものとし凡そ世に生れなりし世ゝに入てさ知識を
さしもし見えしも流俗にも習ひなりし中流に多くなりし能は
変に幸に道を立てるものにして其愚なる下地ゆへ人に跡
さ事をいとなみもして古の法を以て今を治めんと思ふ
者なれは我せんと思ふ学文に法式を定めて世にひろく能に及び
必ずしもなしひ古の人のごとく賢才ありとも人力を以て
すさいは不可なり況や古人今にもしいさるやうなるかたや
尭舜の御代にもいは屋をすまゐ善人の跡をしてす政
のすめる人は少なくして聞かなりしこそ周の盛なれ
なるも九人なりしと学問せしを法式のあるとあれ
ついは古の聖代にも十人に九人まではよからぬものにありしこと

古の才といはるゝ徳知ある才学ある人のかずにはあらしは
博学有徳なりとも人情の変に達せぬ才なきさへ人は政を
なりがたく世間知ありく人には害もなく
あまたいふしき人のえしみなり今の政にあてがふとも
さし其位に備りたる人が衆の情をよく知るは
人情のゆゑもしらずして人の中中く凶徳なることをえらし
とがめられたるを無学なりとも我政をせんとて
学ぶの国政にはかならずしもいらぬなり
一 来書略 明日下拙不善ありたるをうけたまはりし可申と云は
をも、かうしりにはおもろ内に先生をそしに肺肝を御覧し
られしと見えたり
返書略 愚拙は其人の不善をさぐり申べき何事ぞは

無かんに不安ハ夫婦の心に明徳あるよりて肺肝をつくし
あく候によりて後ハいかなる夫婦も戦ふことハなくつくれ愁
しそれ善あるる人の気遣ふくれしくよは大学の有る君
子かしんの肺肝を見ゆかあしとも小人といへし肺肝を
みるごとくなくしれよそハ堅善の理明白なる事にて

一 東書略 楠正成ハ知仁勇ありし大将とぞよりて徳とする天
子よ多ぬはまり知るを知とやうくやはらん武家の世
とぬくさること人誰かはつるや
返書略不知しハ天よりある後気質しひ知て我拙とする
と徳ともそり正成ハ気質よ知仁勇の備ひるへしかれは
堅学をきうせはしくなくひとしくなるさ文武ある君子ゆるへ
く今の時よりハ天子をもおろそかにしてハ正成ハ

今ハ小家の代となれハ世よりハ稱されたる京都の将軍とも
いひしより小家ハ諸大名と傍輩の礼儀にて交わりた
天下の権を握る事ともよりハ頼朝の子孫かなんともおの
れしく事なれハ主君とぬく諸士よのそむ事ハ人情の常
なれハあつかふるとみてハこの故に正成も小家と君臣の礼
なくハ其上相摸入道無道にして己が人を天命あらし諸文
将軍ハ京にありトトしてあられる事あまでで天子にハ
に主君なくハ主君とあまの命をまつかりのかしこくとて
しかくハなくハ後下の権にあくて一旦君とせんやわれしなから
しかれハ平の清盛とも同じくなり後白河院を鈎に天下とあつ
かれハたしかに武家の世ともそのうちも王威ゆるがす漸至
し今く武家の天下ともいへとも これハ後醍醐天皇をもちて

むかしへの王徳をもってよく治りけることなれどさればよ如来
の高時奢りさかりて天皇にそむきしより人民くるしみさはぎ節
天下とられし後は又公家に帰しぬれどもまた一と
たび天皇道をおこしめされて賢良を用ひ給ふと背く時
勢のなりゆきをえらるゝをえり給はざりし故ようしみのことに
尊氏おもひつく出来て武家の権をとりて思ふまゝなりぬし
尊氏にかへりて天下をとりてのち一向武家の世と
なりたりしより天下の諸大名大樹を主君としたまひ
て天子をばたゞ名ばかりにして陪臣の國人君を主とせし事と同
理なり是を以て今おもへば此事よしあしとも事に
此叔士として弁慶氣質に智仁勇ある人はいくばくもなき
なればよく世人知るなりしかれば勇はこのあつかひしたひ

あくまで私欲は衆の上に出たるなし仁は士の上にあてはめ
めいさらばよ人は勇をもって勇なきを知れ仁愛みえ
ず此義経の始めたるをいふ時に奥州
落の時此の方をは弁慶をとりて偕ひて主人の同心を
よろしく死をとりて兄弁慶をもって貴人の乱をやめ
有難しとてわけのうちにきりゆくとは儀の礼とあつ
あさの心は道とも此の方なり身をもすて
よりもあきは鎌倉殿へ其のりきれしなり
義經は其とも不和にて許されざる時は此方を
殺しならば自害し給ふまじき此陸奥道とて落くまで
そもの頭にたよりて
一の関所くみて義経を見知りなるべし

軍功ありしかバ実ハ兄弟にておハしませバ恩賞をもあ
くさびよりしぬところありまた罪なき人の大功ありながら
讒により弟へいるゝをいさめてもく両ざるもの乱るゝを弁
慶ありしハ、見ながらほどハ関の人ハこれをかりのありへ逃所
いひあらしと逆通けしを平泉寺にて八幡殿よりの討手ぞ
をうちにも法師の身なりしが邪欲のあまりに義経をう
かゞいめて恩賞にあづからんとせしをとゞめられしの道
にもあらず一人(?)の首一つなりともとるべからず稚児を具し弟る
ねに跡継とも同じとて時刻をうつすに老僧をしなし
く艱難にありしかり義経の笛のうたにより伴ひけ中
に敵をかくしつかいあらはれ又ハ琴を弾じ給へハ老翁
ともに邪心を廃して琴のまへに集りし時のありさま

さきとハあやまりなくわしき人をさとりしへ人の道に
きたる人も吉なりしにこの一事をみても弁慶仁厚の心を
見て作り平生義理の感ふかくも洞察なるものと見て
あつかふべきふしぎにひとへに患難に衰しても患難
をわすれの乱離也義経一代艱難の場にもさゝへし
従人の気屈なき節なり弁慶ハ仁厚にして勇ある故に
敵よりとられざるのみならず患難に遇てもおのれが節を
ともいはぬあらく終身あつかひのみならず
なり君子ともいふ地にあらはれしかバ思ひれ
吉野河にて続きうく大敵とあらそひ行を阻く
雪中にさし行の心をもひてそのいひさる事をひたすら
ありそれをかるの知仁勇あしく

は東鑑のごときはかなくもしるせる事世に於て上は公方鎌倉中代
の事は委しくしるく遠國の事はとかくそうなり平家物語
義経記もおほかた実なりとみえたり文法そも虚実
まじはりの事それは正しく記しるる書の中にの定ても能
生付の人おほくはまそ眼目よ考可の旨は源氏頼光よ
松の内府重盛畠山の重忠文武を兼たる士君子の風有
る人なりさる程人々に聖学の方法とさくせぬ唐にて
を學る事の人に嫉妬ゑくは討さはおしくおしくれし
事不幸なる徴なり宋明の書周子程子朱子王子等
との註解発明は日本に渡りて人の見るはかりまみ又
六十年ならりならりなるも市井の中にまなく学ふより
武士の学ふるより十年この人武士の中にもも

あらんもしくみえしは后後世には好人の外なる事多し
来書略万物一体といひ草木國土悉皆成仏といふも紀へ
同し道理の根によるべしは
返書略万物一体とは天地万物ともに太虚の一気より生じた
るものなれば人は仁者は一草一木をもゆるがせにする事を憚なり
くいはんや飛潜動走のものや草木などもそれ
まさに目ふりみしらのおもむきを見るへし我心を用うるならば
し雨露のめぐみを得て青やかなるをみるは我心も
よろこびし是一体のなつかしきゆゑなり人は天地の徳万物
の霊といひて其心すくなくたる事あり天下へは庭前の梅の根をたとへ
中よりくれたる太虚のごとく一本の木は天地のごとく枝は國
ぐにのごとく葉は万物のごとく花実は人のごとし葉も

を一つの本より生じ又是より全体の本体用あらし数
有て行わたるなり花実をもてしたがふといへども
一なる本の全体を備へし地に植置しは又大本にあり
おなしごとく万物を同しく太虚の一気より生じたれは
ともに太虚天地の全体を備ふるゆへ人は其霊なる
をさしてこれを太虚の全体あるゆへに人の性にのみ明徳の名
号ありゆへに人は小体の天にして天は大体の人といふ人
も一身を天地に合せらるへからしともふるとみし呼吸の
息は運行ありかくて暦数医術もうらてにしあり天地
造化の神理主帥と元亨利貞とのへ人に有ては仁義礼智
とのみ故に木神は仁なり金神は義也火神は礼なり水神は
知なり天地人と三極といふ形は異なれども其神は一に貫通

虚なれば一理にて大小なきことなし故に方寸も太虚
と是尭舜の君五尺の身にして能く其徳を明らかに
あらはしては天地位し万物育する事に至るの本あり万
物一体といふべし一理といふなり是を万物は人の身に
具足しかるの主なり我心則太虚なり天地四海も我
身にあるの人鬼神明なるものなし堯舜の道は人倫に
取るにもなきあり故に他の道を学ひんとも識みつかどれ
法の事には従はず識

一 来善聖人の書を従とし朱子によくこれし是以来
其の則聖学なりといへり小学近思録等の諸書を
学ひて是にしたがへば何とも心の欲はなしの私情
をはらへ気質の偏をもてあらためしろく陰陽

明の文武なき者へさる名将なりといへりされば近年
和学とて文園ならぬとて人を見下すさまありければ多く
気質変化の学もせずして学ぶ人をば
近来暗推の者ともいひ世間にて此学の者とて理学の
時なれば是をもつてよろしからぬ事にはあらずいへども此学
は聞きすぎて人々の道を道とせずして学もて
まことにいはゞ名を付たるものなり漢儒の訓
詁ありければこそ宋朝の理学もおこりて宋朝の考
明らかにしてこそ明朝の心法をも説て明朝の論あり
しこそおもしろけれ入徳の受用とならば論
残る所なくしても徳は古今にかはらず後生
の者もこの本情をつくし文字に力をつくし先賢の

発れ解をなしいはく古人意元情なるに有徳にあらずしてなす
勿許する義なり一の不義をなし一の不辜を殺して
天下を得ることもせざる所は朱子王子かはらず
世儒の習ひなる事ねがひて是もしれぬ一事は天地神明に
しても古人に恥ぢしきをもしるは我なくして我身の
微さと存じ然るに貴賤の差なく道をしるといへども人の心中
の微は同前にして学のまことありてなるといへどもしるゝ所は
人の無学の平人にも自ら知る事ある[illegible]学の程
来たるにまかせておのれも立処の志ありある
ぬしなれば学術の和にかなふといへどもしるしとあり
不明なるもあるべくは陽明流の学の者とても利
しくするゆゑにはいへども理を窮むる見解[illegible]

く自反慎獨の功も真ならざる処相かへしは慾しきこともなす
へくは只らくハ其愚と知し明らかならんを位とおけれ
事を知されて名根利根の伏蔵ハ其の凡情よりへし
飲上の悔をまぬがれずくはまた心上の受用なるにあらて
ころうしに一ゆかとてそれ程〳〵は志なきとも一念の本
あひてハみなまはりんの氣質變化の学ハ明白なるに
手もしくは大なる志なけれバいつまりくてハ生得まゝ人と先生
間の習よりまぬかるゝをハえりあしく然うる事くハ道を受
はハ一旦のまなひあとよやうふとけてそのまゝ紀本あしくて
また人を氣質變化と申着あるへくは〳〵も出ましも玄
化をおもんはんもいとへ先覚後覚たよ其の人かしあれと相
見へはなきまよ人の人からまけまハ其國本の紀人顔ゆ如

まとくあつまりいさるまよ人の人から平人まで平人なる
まるは王朱の学みれ異同よハよりして先哲の徳と不徳
よまれり悉くたるまよハあれ〳〵もあまた大略をそれは
ひるよ人をいそく私身の濫と致しは〳〵てしりしの人から
ようて恥しくは〳〵古の人ハ門弟よ人の従来多く残れてあ
ましよりあるか識より来れ人の善不善を見て立異徳
をおしと承れは

一 番書略案朝の理学明朝の心術と承るへく程子朱子を
道統よあれいしきおるらとしいゆく
然書略周子の通書をも残見ん候まハ聖人のそぶえあり明
道ハ顔子の氣象あり後まん賀着のよくをまよへきよ
あしきと伊川の蕙量朱子の志とけ聖人の一新あり丸む

なり凡此ハ同し聖門傳受の心法にあらずして何ぞや
然るに今其学術を論するに人の言説をいふのみ惑を
解しの学問は性理学といひ心を知るといふもの多
く秘術といふ秦火に経を焼かれ故に漢儒の功を
一 訓詁にあり其後異端おこりて世にまよふ人おほし故に
宋儒の学ハ理学にありといへとも今は人多故なり
明朝の論ハ心法にあり
一 素書略 太公望を微賤よりあげて三公となし給ひし
事不審多く周公召公のことき中行乃君をもち見て
よく軍旅のことに長したる人也いはんや
遊書略 古人の言にあり老人なりし微賤に居て下
の情をしりて知識ありて時勢に達せり生涯をおくりし

上臈は下々の情をしらず無下なるしるし人のてつにいる
ゆへ道理のよくに下知し給へは下に親く行はれて
これによつて是以帝堯ハ諫鼓謗木を立給へり又賢
才の人も下に居て上臈の風俗を見て政道の勢
をよくしられし下々をもしらぬ事には多くあり然
しるに太公も君子に変て上臈のことをしりなから又下民
もしり太公よく下々の情に通し給へは上下ともに人情に合
ぬことなし此ゆへに軍旅に達するは後しめは悉く知しめさ
れしも天経と大将軍の器量ある人なる紀用ひあらし
なり六韜に記する処の文武太公の論ハ皆天下を治むる備なり
一 後世の人とこのむにはあらしを非なりといへる聖賢をとりのく
軍の功利の術をこのむはあらぬもののなりし事にいへる

一　しかれハ仏あるハ何を以て聖人とハ申候らや
来書略中華の国聖代にハ武威もつよく末代にハよは
くなりしと申ハいかなる故にて候や
返書略北狄の中夏を侵しとらるゝ故にてこそ候へ
以聖賢の代にハ文明なる故武備ありて侵すことなく称して来
朝せり末代ハ文過て武をわすれたり文の過たるハ古
者なり士以上ハそれぞれやはらかなる故武威よわし上
驕者ハ民の上をかね上下ともにして武をわすれしと無事
の時ハ民も女の様にて仏をたのむ人ハ状ひとつ様なりしかるに
戦国にのぞミて士の手足となるものハ民也手足ハよハく
し身ハおごりてやはらかなる事ハ北狄のあなどり侵す所と成
ましかりなり賢君の代にハ文武兼備なれ者ハと

らと、ここにて何事ハ上臈もやはらかなるしたがら
ずと身を病かしくて手足はたらかざれ小狄をとられ
てはことなりぬる事むなしがり日本を神武帝より則
應神の御代を後までも王者の武威甚つよくおはし
ましかハ漢朝にも文ありて武功多く人ハ京家の人
となし武家のものはしかるハ何故や武家もそれより中の間に
次もなく武なるハ入るるを平清盛ハ武功多くへ武より
弱くなるも一門栄耀にほこりぬるにより二十年余
のうちに武家によりて滅しして唐ハ三百年又百年治
まるく其間に文武の業ハやうやうハ武ハ弛とも帯せしむ
風俗のなりしもなりぬるハ甚やはらかなる以て聖代の繪
をもし紘を帯をかへさはなくして

一来書略。文王を野心ありとうたがひ奉る人多し。又征伐を
ゆるされ給ひしハ心得がたく候
返書略。曰、殷王代の征夷将軍といふべき官なれバ西国の諸
侯のかしらとして與国をひきゐて北狄の中国をおかすを
ふせぐハ、退治せし時ハいまだ周一国の諸侯なりしが、
おもしろき文王とハ賂号なり。そのころハ西伯と申
なり。西伯の紂王に忠ありしこと多くひとしからず。天
下の諸侯紂王が悪をにくみてそむける人三分が二なり。
其二分皆西伯に志あり。此時西伯軍をおこし給ハヾ紂を
ほろぼさんことたやすからん。然れども紂の西なりしかバ西伯ハ紂王に
無二の忠臣なりしかバ、天下半ばそむきたる諸侯をもひきゐて
く来朝し給へり。紂王ハ西伯の心をしり給ハねバ、人の言に
まかせて羑里にとらへ給ひぬ。其後ハ来朝
する諸侯もなかりしかバ、北狄もくらゐをうかゞひ
此時紂王初て西伯の功を感じ、ゆるして国に帰し給ふを
のみならず西国をあづけ給ひて世狄人をふせがしめ給ふ
の代の末に文武共に人中夏にまじはりしかバ北狄
未だをとらざりしかバ、よりて周公を征夷将軍と
して征伐をしめ給ふ。此時太公望をも給ひ
狄を征するにも軍法を論じ給ひしことあり
しかれども六韜の言語のあやまりなるハ多くあるべし
一来書略。不幸にして壮年の時文学をまなび、老学のいとまなく
五十に及びて家中の外も用人となりて年すでに
くれ朝に道をきゝて夕に死するの一語を杖にひかへ

有り
返書略 家老たる人の道を好み徳をたつとひ給ふ人ハ忠功
のむねそはゐとひ其身にハいとまなくとも人に道藝の
ともしむるハ上下の立人の役そはなハ耳目手足の能
あけまくもなく耳目手足をいたはしくそなへたるこゝろ
よはなの中とれしさ人を家老としたるそのまゝ人皆ともにし
もいひ若けまとも老人の公道ある故に老とも作
老の字は理にかなうてひ給て幸甚たるべくは
一来書略 先度は御下は家老たる者ハ身を無能無藝
なる人に道藝をとらるべしむるハこゝろへ藝能ある同
しいの義をも教にをは職に人の上に立は者いる能多能
多才なる学問なるべくとも人の賢なるを好み人無能と
そこそ仕よしもハこゝろにて此人をえらんくはら其上にも
とすハ心得申候は道学にハいつれの流をよく候や今時朱学の権
法王学陸学心学なとゝて名の多くみえて申候皆古乃
儒道すこしも違ふはや
返書略 学問の手筋の儀いつれとうしたるをめしこともに
うつし總してをこ学ひくだされたる者ハ人道の害に
成りたりに身の愚なるあまをとも心ゑもちをもちて見
を立てとらくいふへて無るの人にて物にかゝりせは一向に偏
儒の受りくるか心得るる者を招きて経義をとき給へし
其身文武二道の士にてみちて中之かたきくは文武士
たる人学問して物の道理を知給ひきまに武道のつとめ
ともはく今の武士則古の士君子なるべくは

一来書略鈔ニ仏経義を学ひても仏法をいらぬ受用可
候ハや
通書略聖経賢伝道理正しく候へとも誰によりて同
し事よハいかに理を論し跡を作りいかれてそこそ
いかのありけれともそれを心得ぬハ仏術を受用せらるとも
人も凡情あれハ伏蔵しかりけるハ先に功なき所多く同し
くハ有徳の人あるハ其化によりて人絶多く其故
その無てハ徳ハ人のしれぬ事ありてハ人己一人天理
となし人欲を去たハ人欲を去く天理を存するハ
工夫ハ善をする事を太るハ多く善しい子を学ふ事
をはじめてを存よふくハ備用の為に人をさるハ
こと善なる君子ハ義理を主とし小人ハ名利を主と

せ仏法を義理を主としてよく仏法を受用せらると
思よ人の事とも甚し人々の全体の小人の位に居よく
さりし志しぬるを徳せぬ事さるもの古今如何し心不
とよく得心し聞へて後聖賢の書を見給ひ人の心を
務しれしいく皆入徳の功と教ハへし仏法ハ大学中庸
論語によらハ多くハへとも学者の仏法をしらさ様して儒学
とかなる読しなれ事よハ仏法を受用せらる人も今ハ仕
位を知くならす読てより一生の訓誥に終る
かのなりし又学ふ見も大に精くかあるハ大方の凡情をぬ
ふるものにしハ余るを知りしより見解の成就する人ハ
まことなる事なり大方ハ水のあふしといふさせる様にもそ
みるとし毎を真によつてハ又一生の人あらせ付候ふ

もくもとろかにして小理の惜を信しあまりにこちたく
むつかしくさらに親しみかなり聡明の人ハ小惜小信をいたくはなれ
の功なけれハ理学にはいさゝかくはへても徳をなすことは
かたし経様によりみれハいろ〳〵流学に志ある人も昨日の
我かかハ今日にあらためしよりもまた學流によりさたまりなく人気
このハかハりて益なく人ハ多くあやまりありて多くなりてつゐにかはりな
おもしろく候てハ能くよく学者ハ人の非をとゝむるにハ
しかめしきを用ゆるハ己か非をくりかへしくるしからす候

一 来書略武王太公伯夷叔斉の是非を論する古今多
くハ候へとも其精義なるかたく候

返書略古人の事ハ不存候共今武王太公伯夷叔斉本虐
はたく拙者ハ伯夷によろしく候て首陽山に入り一論る

不及ハ此両道を明辨を候とも聡明のさかりにもや
く候聖賢よりかハりハ換りし俗にてはとも時の変にしたかく
を論なるひとも見てハあまく人道ハ堯舜を師とせハ
あやまる事あるへし候変にあひ給ふ聖人にてハ文王よ
ろしくハなくハ文王と伯夷ハ共に傷害なからしても出てつ
くして武王ハ文王を害の礼を以て待給ひしとつたへき
承りけり

一 来書略に儒者と仏者と議論せさせたく問
度ものハ疑ひのある故か邪なる故にてあるへく存候

返書略法論や儒道仏の論なとハ気力の強しきさる
か理のとりまわしありし勝と見ていさ人の勝負
まて道の勝負にあらす聖人の道ハ謙道にあらそふ

ゆへにかきとむる言ハ綿々として分明ならさる也
孝経に曰く孫子か故にこたへ生するハ天地の間に人の
あるハ人の腹中に心のあるかことし天地万物ハ人をもつて主
とすへし有形のものゝ人より尊きハなし其人の道なれ
は何事のあるへくしや

一 素書略 七書の中聖賢の論といふハ非なりといへとも多く
功利の徒かんする言にして何事を用ゆへからさる
也 書略 仁義の心あり仁義を名ありて後用ゆへし大
軍を正兵となして威を以て敵を制し小勢ハ奇兵を
用ひてかつて総好て敵をくじき是兵の正と奇とを用
ゆる事なり奇も正と成時あり吾ハ義にして敵ハ不義也
吾ハ善にして敵ハ不善なり善人をもつて軍士ハ皆曰

義士なり不善人をもつて士卒ハ皆賊なり悪人に
めして善人をそこなふへからす謀をよく敵をあさむき
味方をそこなはすして敵をほろほすハ明将の常なり
七書といふも其明将の行ひし跡をしるしたるものなれは
又ハ軍の才気を生けし執着の道といふへき事にもあらぬ
と成ところ軍功を立る君の言をあらはし其軍ハ才ハ君
に似たる所あれともまことは天地各別なるものにして
一 素書略 佛と云これハ無用のことなり我か己か明徳を
明らかにせんとするものをさまたけしハむさむさにおよぶ
事なくて居に安く三教一致とて是を罪あるようにいふ也
也 書略一致といへとも其のものゝと一致と空言可申候を
しらは其上一致ハ本の端也同し佛道の中にても多く

各の異見を立て偏争ひし所ハ別にあらずすべてそれ
されハいづれも雖よくい備着を天地の子なれハ我も
天地さんより生れ皆兄弟なりしかれども或ハみな所の異なり
より或ハ世にひろくもちハひまよりてさまぐゝにまよひ
い儒といひ仏と云見をまねてもいへひの是非を争ひ何
との見とを忘まてくわれ兄弟なる親をしらずめくらとい
へむかしよりへだてるまもなく近くに職人の子も兄弟なり
ど一人ハ大夫の根からじまるり一人ハ具足屋となりたりやすく
しまとなくもへきいへ甲とおくへきこの争あり或ハ東西各別の
他人なりし父の兄弟の親しみの見ゆハ職ハ各別にして
く争ハあらましくいかでハとうふひ放しきもかけれいへともも食
物よりも兄弟各数奇こそらひあるまじかれて味とあらへし

ひいたる各の口のミしく本ハ二一致なりいへるものしいくよかうゑ
まくめして我ハ我人ハ人せよくい聖賢なる御代なら
てハ天下一同に徳よしかれハすくいまりよしともも尭の
時に許由あり光武に厳子陵あり孔子に原壌あり
聖人の上に在るなどもも天下にし鳥ハ鳥ぢやうに世海広
しも魚のとのれらにあるゆへなり

一 本書略に抽着文学にかし仕官へとむ才徳なくて儒者
といひもの禄を受けてを恥ざる事もあり又
近書略今時儒者といへども人の中にまじり夜をかくし徳
とするは道を思ふ人へもしれざるくい儒者の名ハ三皇
五帝夏商の代までハなかりしにのちめて周官
にあらハ郷里にをいて六藝を教ゆる者を儒と云とい

は一人の役者なり今の儒者といふハ史の官者にて
し博識を以て業とせり素王曰文勝質則史なりとぞ
さまして今の儒者の徳なくして道を行ハざれバ古の史のごとし罪なきを
あらはし聖人の道ハ六備の人道なるをもて天子諸侯卿大夫士
庶人の人等の人その行ふべき道なり躬に儒者といひて
道者ありべき様ありしその同と教て産業とせしかバ人に
くんさまにあらハよらぬも人をとらへて士民の師と成
給ふを名利のるなり此外先覚後覚をさとし朋友
輔助相救るの義あり人幼にして学ひ壮にして行ひまた
教ゆるの道あり皆士農工商の業あり乱世久しく戦国
の士礼楽文学みないとなみすく武事にのミ居て野
人なりぬるゆゑハ只郷里にして芸文を教へる者ハまかし

のことく行けり古の事跡を知りあのゆへに聖人の道を
說者を儒といひけりそのことハ文学の備ならりとて
里にうまれても其家に産業ありて聖人の道を
名付く儒者の道といふべき道理はなきことなりせの
いひならハしにあらぬさやうにいへるまでハ人の合ぬ
それより称等を称く儒道と申なり古の人者いへることを
つかへしなり今の儒学をいふハ史となせる学の
とおもふにしるを総て古し鉄炮とまなびて有りし
出るるゆゑにそれ産業ともれも罷て戦国は
まこのことき学校の政久しくたえまして史儒の文
芸をすて経伝の文義をかへさしりかの事なりし武芸
者まよぶ弓馬兵法をならひて武勇を脱を武功とすら武士の

事なり史儒ハ文を学て道理を知り道を行ひ徳し
入べきハ大学の人倫なり故に今の史儒ハ真儒ならず
かぎりなきことを事ハ諸藝の中にていく第一重
し其後文学ハ無用なく他のすにかまハず只天の
與ふる材をあまたく文藝を以て禄を受るとも何の害
かあらむの徳を知る人ハ文すくなき者貪ることをめ代
仕人を求めハ史儒より勝て事をあつかふし晋の陶淵明
ハ酒よりくまてなりとぞ市隠の類これなり真儒
とも身を高ぶるもハ知らぬやしけれハなりとも識るとも身
と見るる者ハ徳なきぞ故なり今人徳ありて儒
あるにいへ共ををと言ゆる其身を見るるて道と
わからぬし故にいかなるにハやしくつるをさハ
るしと称りつくハ徳を好く儒者よりくれ故へ今の人
名しきわやゆうらを不知して仏家道家をもいはるく
儒者とも一流の道者なりとおもへり大樹諸侯卿大夫
士庶人ハ大学れし人とて道者として以人儒者ハ一人の藝者
なんぞ世ノ人弓馬の藝者を以て武篇者といふと武士も
人ミ子武篇者なりとへきゟこうし然るやより漢の代より以
こころ大学の人倫のほかに別に道者あるを以て異端
ともいふ儒者仏者ハ異端なり其後周室に出られし
此儒のことく一人其役者として其後異端の徒とされ
ぬるを称して幸甚とらへくい

一 東書略抄ハ同役に利發なく作法もしらざる者ハ道理り志
なき故何方にゆん談合するにもあひらく気のよくに存ハ

道理を得心もなりし、訳をしりてはなくば、いかで和解せん。書中にて
を見る可し。ゑや
通書略抄をも見及ばば、利発にある故に、貴殿我等ごとき同志
の非をよくみとがむべきにより、そこもとの非をば人々にもそれを
多く申しなどもせず、察しとて有之分は、かへさうとも、あしきのなくば
志あるもんは黙して居ば、とりわけ取らずにはべらん目くらみゆく
ひもはなくして中々志はおはしたらしくば道徳の益を得
ものを御しこん、それにはすなはちもよきたるとも貴殿我等ごときも見えなば
慧ばかりくば貴殿我等をそしる者の名あしくは、一向に先生丈よ
そはゆるされる所をあなるべくは、知えて、しまひて事しとはあらん
ひつまりもそしる者の名ある故によりて、そしりしかば同志の友に世間
の人も非とは見らるる、そして同志の非をも見ゆるしは他人の非

とあるは何の用にも不立して、却てさわりとなる也
事なれば同志の非をよく見て互に相助くべきなれば
御同役の人も貴殿の徳に乗じて後々は志を出来ぬべし
不行儀なる人は我ものをなくして只人は作法よくは
その身まさしくなる事をあるまじくは不行儀
なる人は他人をもしらず、我身の悪にさはりあるゆへ
いよいよいとふべきものにては貴殿の御同役をそしりなどは
よとも我身の無学なることを知らずして思ひ違ひある説方の徳
を語らひ、ゆるしかけ給ふ、また利発なく世情をも
得よくはいへざれど、貴殿ごときよりてなるべく同志と同じく
身をなされば、さて同志の人情をもしらぬ人ならば事の損
疾ならんくは肉しかしくなくなしむもあるまへはい

なほしこれ道理の書物を御見候とも甲斐なき事
にて候なり
一 東書略十月は亥の月亥の子と申て餅を作て
くいならひ申候事は何と申たる謂にて候や
返書略 和漢の故事は存知不申候へ共愚見を以て道理を
辨へ候へは十月は純陰の月にて陽なく候亥は六月の亥の
日よりようやく陰気極りて陰極りては陽を生し候
子ありのは母なり生せしむるものは子なり餅は陽物なり
故に先人身の陽を調て天地の氣を助けんと陰陽
相対なる時は陽を尊ぶ君臣とし夫婦とし君子を
なみし丈夫とし候しめ尊て事は陰の為に陽を破る
事ありこれ微陽は純陰に敵しがたし子とする時は
萌は萌して生長せしむ故に陽を亥の子と云へり子は日
本は東方なる上に小国なり陽の輝なり是故に
別して陽をいはひそうらふべきむねにて有べく候
なれは
一 東書略具足のかけかたは右をよろひて候は具足なり
候はへとも古来は承り候へとも右を不知と申候
返書略 一文字は戎衣して天下を定められしと書経に
見へし甲冑は戎狄の衣服ゆへとは聞へたり南西は人の
衣服左まへにして袖みじかし又戎は兵なり戎衣は陽を
とる服とての義にていはんや兵服の物は戎服にか
よらって戎衣と名付是によろひとて戎字をとつて
よ海をさるやもいひその服つくりの服義の中右

まへと袖なれしはなりしゆへてむかひをかれ服の義論さ
悪くいや中国の人を甲冑きたる体ハ戎狄の形り
似いゐ戎衣なるか故よ右とゝんてのをされふく可ゝ有となれ
むかし日本にはよろひの上ハ袖といひて別よなとま付いへ
是ハ矢をふせんかるためなりそて用ひるものよいひ近世
ハ鉄炮まうりて袖のあまて益うなくいはなよ次第ゝ小
不用ゝ異国の甲冑よハ本よらなきさりのよいゝ世

集義和書第一終

集義和書巻第二

書簡之二

一 来書略 武士たる者ハ本来まつり高名をなく立身せ
むと思ふ心を以て学もあれは文事なとハはるよま
さ無骨を稀なれハ無用なりと申者は武士の心よあ
らんおいいひくりの言もを以まつりの是ますては返ハ承
返書略 いへまうも非すてハ文徳あつて道をふまへきょう
もなき武士ハせめて武道一偏なる心かけを第一として
只今まると来年あるへしハ也はたれるをかれせんとおもふ
てありなとまて病死をるハ無念也ふおもひしを耻也
あのれしも浮気なくさやうに思ふハひかことなり一戦
為せんと思ふ人を又同し心あり死生二つよ一分み

と様まてをかくら弓矢鉄炮の憂あれハ死ハ十あつて生ハ
一也さる者ハ立身をのそミて事あまりしく禄の〔ハ〕思慮なく
かるき事まハ十死一生をもつて理運まある名もかさ損ハ
思ひ更ハなりうる故勢を乃んしくいひとられもちのいかにあるも念
つ其上天下の人妻子眷属なきさくろしきを取り人たにと
いかしは命を合しかへる名をまつむしをも一人乃小功
行のためふ万人をくるしめ人のなきさをあらためらく名
事利用とせん事心よあらうようしむ仁人ハ国天下
をおもそも好さるゝなり兵書ふ云兵ハ凶器なるの
誠をせめは罷なき人を殺さん人を殺して其国郡
をとり貨財を利とするハ盗なりといへり悪人ありて乱
をいてとようしる名せんと思ふハ不忠なり其ハ又富貴

貧賤盗賊嚢捐のまて如此のともがらありて兵乱といへ
ふハよ従心ぬありけるさまへをとかく武道武藝も従
らひありく屋のものありくは役利のためまさきとをあつめ
ハ志ありそのありぬハ義よ何事もそと禄のふ人よ同あるに
ありくハよ従武士といふハあくまても勇ありて武道武藝
のありうけぬらく何事ありても怠まんとするなき様よ
たしなみさて主君を大切よ思ひまつり自分の妻子ある
親あらく天下の老若を不便よおもふ仁愛の心より世中
の無事を好み其上よ不慮のありぬ時ハ身を忘
武家をもと様て人をたすくるとをかし軍功を立る
人あらハ一文不通の無学といふとも文武二道の士なる
へし世る小文藝をしらす武藝をしらさる者を文武二

道といふハ五常にわたれりこれハ文武の二藝といふべし勇
もかけぬれバ智仁勇の徳なくハ二道とハいかでかいふべき
一 東鑑に歌鞠を武士のたしなみにあげられ頼朝卿の次ハ鞠
をとりてあそび給ひ其次ハ歌を好みたまへし然れバ
惣じて武家の弓馬よりこころへて歌鞠をとりてあそぶ
ハ不吉なりといふ事ハあるまじくや
返書略 歌道ハ我国の風俗なれバかならずこころえおくべき
事なりといへども人ハ本ありての枝葉
に歌をよむべきにはあらず学問の道なり学問
の道に文武あり文武に徳と藝との本末あり文の徳
ハ仁なり武の徳ハ義なり仁義の本を立て後弓馬書
数礼楽詩歌のたぐひなり弓馬書数礼楽詩歌
文武の徳を明らかにするの本なり文武の道をよく心得て武
みちをひきて民を撫で其余力をもつて月花にも野
あそびは歌をもつてあそぶことなり和歌も好人
たるべし頼朝卿の末のたえたるハ歌鞠の罪にあらず
其の不道故なりかなしきかな武道の心がけに過て亡
あまた家も和漢ともにあまたあり是ハあやまちを武道の罪と
可いはんや本をとりてみなく論ぜバたれか人のつくしくハ
鞠ハ親王門跡などのもてあそびにて武士のわざにあらず鷹の
歩行をなせしがごとく輿車の御あそびをなさるるが
足かろくせんため門内にばかりあそびて気血を
めぐらし鬱散に鞠なども御あそびあるべし
家ましてそれとても学問家業をつとめあらし

に御養生の為なれハ其かたへハ是非なくともあそびを
専らとしてかなりそれハあしき事なくバ
一 素書略に勇ハ沈勇がよきと取ばさましと力をたのみ錬よ
それハうちみるよりまとあるべく存ぜしハ人乃武勇も
強弱の武と存ぜしも沈勇をわするべく人ハ先一人ハ百人
一人のみく大ちき見実の及ぶたハかるかしと存ハ
返書略まてしに力なにとさきまさまるといりつゆて
見ゆるすゆひむかしハ今の捨よあめしをれともを事海
まとなる故よ両自分の目あくかまさ力を目利にて
秘めさしたるとや備しも我両もそまよ心付く
見習ひ之大かくともあくさりハ孫のさてひかく精神あるが
しくえこしとおくろハさましやひ孫かくくても精神か

く衣のおくなるや練ましぬてても底りかの
きもとハ其善悪ハおしし心法をもまとて見てやいはゞ文大なるま
てハ見てくるにいのあるむさにに似たくどもみかくるやうに成にさ
いなく空の曇てとまるおもくぬ雨の如くそうとくなくさ
へくとそてひすれさてろハ見へさるありき是ハよくなしまする
ふされりのふあくハ沈勇をも文武にし拙く見かざしおる
武士ある若ハく武勇ありへきふしてゆりのものあるハ刀
いされさう能あるりのなり柄鞘まく金銀象をはふくら
きりてやうれおそかくすよれかしに流めそへさゝれ鬼
ていは武ハ文をいくさる人とき理なきハ勇ハ仁をもって
さ純くゆく平生ハ礼儀正しも仁愛ありとかうくかし刀脇
指乃ちやうへ自然の時の用までをもなく勇のあや海

ら逆ふ事あり貴方の勇氣ハ不腕指乃ごとやさ様に候ハゞ
さやうに流めぐく御さし可然候ハ甚だ勇力に誇る
乃ハ猿多く候ハ甚善を有るそれそ乃善を失ひ能ず
誇る事ハなき功を失ふものハ古人の格言なり勇ある者
とハ人のなく候てかくの手柄ありてもかゝる事ハなくていひ
あらすハ扨何事を致しまして縦容あらせんとして又よく
生きられ手柄ありても大身となりても死ぬものと申候さまを
常々も敵多くてやら死ぬ事多く候むかし三十年甲冑を
枕として山野を家として居られし名あるのミならず武
道の事功者ある者ありさ若きをもぐらおちかくて武
老人を請じまうせ武道の物語をきゝてはよく老人の心
を忠ハ人のいよりての手柄もなれしかのさ時より愛敬あ

りて人によ愛せらる事ある是也世の流に世にある者あり
武篇乃極意ハ愛敬なりとせり何事も其極ハいふもされ
ハ道に遠く候

一 来書略 生ハ人の好む労するなり死ハ造物者の我を安
んずるなり狂者乃親の喪にあふてうたふ道理なりとい
うの死生をおなじふする也同しと志をもちて生をかくみて
死を好むを可とし申しや

返書略 労安乃義二つにわかれて昼夜をわかつ如くなるへ
し夜ハいとく安く昼ハおきて労するを志てしかも夜
ハやすみ極まりぬとて昼乃労をわすれし昼の労極り
ぬるハ夜乃休をおもふ死生労安ハ時なりあて造物者
乃なさむまゝなり私意を立て好悪をこゝろは狂者ハ凡

人の生をむさぼり死をにくむの迷をさとしぬるさらにゆめに
遺言あるものなり其見所天人陰陽のかたに出たり聖人
ありしよりけれバなることにあらずして志まさしくも中行ハいへし
きたる故に其賢をわきまへ狂者ハあらざるなりて賢を
しるそれハ大知ハ愚なれバおもし物あるハ則あり聖人ハ道
と同体なり天地万物の則あり何そ見解と立べく物理
とあらんや志まさしくとも狂者の心をふかくみるへし

一 来書略拙者在所に人相を見るものあり何とぞそ本ある
事に候や

一 返書略おほかたの事くは相書云悪乃禍之兆善乃福
之基しかりとも相の根意なくは

一 来書略拙者在所に気遣物なる者おはしまし候二百

石が力上ありしが死に臨てのぞみなく天下にいひおかれし天
下へまはり持なるそ御沙汰をれて相果候天下の武士
其若代にはなきはゆくへ是非なく拙者わりなきはいかふ事なく武
人ハ是ふしてさたむるくは寄ひのさよくぬ故にこそ
ありつるひつかしくふかう候ては主人とも争ひて中々候や

一 返書略天下の武士の心ハ志あら候物して天下ハ父祖よ
り受来ましかる党も抱にて及ばずで好でのそよしきを
れは我らも国郡も又同し野拙ハともれおかりし大樹君ハ
と代官をしそ治世に拵かく也しまにに仰らしねばみた
りやうれわりくき此事なく万家しいらひありて候貧ハ
士の産業ハ楽しとあるまじに色へいるハ許由り耳を洗し
からも堯元帝と代るとしく山水をまもの心ハ何の官位

よりかよへき我に天下をゆつらむと人の代皮をせよとゝ
二度ひゝすときゝしとて耳をあらひしりなり何の苦労
かくたまつりかもあるを天下も承合をなく君子ハ故
するの利を禍とも國天下ハ名を得て持たる大安也大
栄也名をすくて持ハ大危し大累也これ有ハ是ゟ後には志
つるて天災人乱及ては匹夫たんしと死亡にをまぬか
れかたしといへりこれ故にせん程ら受取つとする國天下と
ゆくおそれハ我欲のためにあらすひとへに也聖人の大寶
と位といひゝく富貴なくてハ万民とをくひたくなく
事なかりし受さらハ天下おさらに仁政をしひて
下を安静おさめひなを楽しことハ儀なくは
義をなくてをしひるき報にハるりのどうらくしそ

もつるを思しく無為れ也にハ夫利欲の人ハ天威のとは
いまてわかハき我も又そ臣となりて、かしおそれハ勢
ひなにわらハたつき主君とも失ひやしくハ是以漢高祖
ハ我頭を称らひる君を知るかたてをくれは人情を
なり則天下ハ帰する所ハ人力に及いさる事を得んあ
ひとる故なるくは

一 来書略節分の夜大豆をいり福ハ内へ鬼ハ外へといひ鶍
のりしらをやきて戸口にはしなし仕はすハゆへとなき
世俗のならハしとおもはれとも信にむかひてやはや

一 返書略秋冬ハ陰氣内に有て事を用ひ陽氣外に
ある故に立春の旦より陽氣内にへくす事を用ひ陰
氣外に出るのハせんかつめたまりさえてとも餘寒甚しき

なほまた豆をいりて陽氣を助け屋のすみずみまでも陰
陽のかたちを隨にあらはすものなれば鬼は陰なり今宵
より外に出るなり神は陽なり神は福となりて今宵
より内に入て万物を生ずるなり鬼は衆を養ふ物にて
仁義あるに依て邪氣其番におそるるまじ邪氣をはら
ふとなりひゝら木をくゐつゝるすは世俗鬼の理とも
らでかしこきすら鰯のかしら理あるやうにいはるゝ人も

一 来書略今時なま学問をする人は物を尽する様にいふ
節は世中なにもなき事をやふる人はなまにて此下も何
ごとをかんがへ理屈多くをし此神道も王道もまさ
る様に成行は我見をたてる事異学の風なりし
いふ

返書略古今異学の悟道者しかじか上古の聖人の道に
なり上古凡夫の民には狂病なし其悟道者には仏病あ
りこれ地獄極楽とてなき事をつくりさまざまに父
さとりとてやうやく地獄極楽のなき事といふてと
よるなり無懐氏の民にはならふ沙汰ひがし是をし
くさとりなりてそのしめくくりなし我身をかるとか
ふは聖人なきはせめてくみくはしくそ其上に自滅出来
く人は地獄に迷ふ事を我は迷はしと思ひぬまぢ地獄
のなきをしる一事をしりて何事もかとも知りていふにて
ばつ我のなくは儒仏共に世中は此我の見をやつとめ
まては

一 来書略仏教を内典といひ儒教を外典といふは事心

と自しひ敬遜をかと中絶きハ佛教ハ心法なり儒
教ハ外さまの志を説法なりさや儀式あるなく
い又儒道仏の三教ハ有無中也いつれも霊妙なる
ふかわうされとも流りさるる所儒ハ有相の上此道也道無
無相と至極とせり佛ハ中道也有無中ゟ離れ機よらり
て説といへとも畢竟ハ中道言執よ帰着すといへり
逐毫釐敢又あるものハ皆無からせし也ハ有無二よわ
らぬ中と云ハ天理の別名なり有無よ對する中よハあら
ず堯舜なしめて易の治を發明あり給へく中と名付
給へり則天下國家の平治斉とても中此外無二心無二道天
理の我よありて未発を也と中とも云天理の我よあつく
已発あるを和とも云修身斉家治國平天下ハ已発の和也

則中なり物の天理此至精となりて至易至簡なると中と
云則和なり佛氏とてへともそりと有無を二よせぬ故郎是
空也是なり聖学とてへとも有無中を別よせぬ故と云
とハ天性なるとも佛氏とてへとも有無の中よ入て立へぬ
仏書云心性不動假立中名亡泯三千假立宜稱雖亡而存
假立假號道着とてへとも無よかくらる後世の斎とさ
じめ仏をひくさくるく太古朴素淳厚の風をくへさかを
へり仏仙たよ聖学の德也語も理もいつくら取来らん
や儒よハ聖学の傳来明言を失ひて久うく仙佛よの
これとくまるよしく又し先天の圖を仙家よ始るよて
得心あるへくいや聖人乃門よ出てるあとをきさやへを
仙仏のいふよりきたハ皆異端の語としていきさきぬ彼を

聖門の末紀となりては夜明ひ只三代の礼楽も浮屠に
みこまるおとなり人道にハくりて戦国のくへしかりし尽
まとりまひめるとしまへしまへ聖学の至言ハことごとく
端になりて儒ハ土苴を先ぬるべて道徳の高下浅深を
論し詩の似るをおいせて同異をいふ尽こ郎なるへら
ら内典外典の名ハ仏者よりいふをもとなし実ハ儒者なま
孫く処なり秦漢よりおのつさ士君子さん人道統の徳を
失ひ只く執中乃心法をしら須道徳をかりてさとり
故に儒者の道ハあく如斯ものと思へりさましいるゝ明の人
ハおかく仏に入仙に入道家も後ハ天仙の旨を失ふ地仙に
落字より是をも又心法を殺まて多く仏者のは心法をとい
尽まことも尽そ仏法を内とし只儒道を外さいへり

一　東書略出すしてきたりし経をかむりし叛語を取り明慧し解
脱と同なりして階次を過ちまなりさたりし金須多
くおとし来なり解脱を見ることに大地あるとてよ
そく通ずまにて所行すまて又云先此物ハ空て他合へ
きあらハ信ひとく取へしと明慧云かをさかへまて指来
彼人やと解脱の心ハ罪に地によしひとく人を害をるを
のありといふへとを見んよろまれ机し金眼に命をとろまくたん
ハ眼前に教をしるん誠の大地なると云義なりおかぐ
ひの見解をしらく世俗のまよひをおそろるものなりぬ慧
ハ金銀を石とみるも同しく見なしてとうくの見解を
し識よそるかよゆるさ心地ゆく聖賢の心経とも派も
かそりあるましきとなり

返書略　両儀の間なるくは心任の浅深ありといへども聖学
によるときはやまとを見解なるくは心地自然にたまく相応し
とはやかうらかへし柳はみどり花は紅とそまくに物の
軽重を精定なして正しく我おのづからさするぞうく金銀
ぐ木石と同しとみるといふも見解をひくく悩みとる
ものなり云物自然の心にまく見得らるは我こそ金銀は
らはとも世間の人の宝として世をわたる人を養ふ物なれ
は宝をおもしろる志は主人のあるる人の使ふを身の一端
の人にはまちて身代を保ぶり命を亡ぼすにたるべきは郎
従なる事なり去りこの人の見得ないは慢ひ取て我物とし
へし就ての見てるすそ薬なまにとそひとつひとく過思
此志あるべき者は純重おもしろき道によくべきを庵さらにいふる

あらんこそ天性の仁愛なるべきを明心の霊をぬきくす
科異なるもとしへとも其はおけふ求は一なり世俗は物欲のち
己をひくぬさき学者は見識をひくぬきくりの也其
題至所に近よりおもくなるを其は徳来のよる爪天つに出さ
れは純に正道をなん事かし道の行はまされるすかし
むべし
一来書略　陽気に我意ある志は軍陣までよからぬよか
説は文利害うしこさき者は武篇絶えとや仰強弱なん
拾あるすゐくはや
返書略　加藤左馬助の孫へ乱世にくは諸士の武篇
に目利あるたく理直なる志ありて武篇にえと心得へ
しと又越後の景虎の此孫ひしは武篇のさくらえる

武士の常なり百姓の耕作に同し武士ハ兼て平生の作法
よく義理たゞしきをもつはらとし武篇の心かけ有へきを
もつはら行をおほく勤る人ハ主頭ともなり又ハ名將の下に
ハ雜兵なれとも大かた武士は武篇にうとき者をはしめ
さるへくハ陽氣に我意ある人のことくも臆病なる生付に
てハかなしみ常に習ひなく何心なく其身にへそましとはし
くおもひえての事なれハ理直なる者ように氣をおちけね
生ハ常たしなむ事放埒無躾に任ハ其時におもひかけぬ事に
て行ある者見苦しく又分別なくて利害をほそうろへて
常に義理を心かけさる故に自然の時義理をわすれ候ても
臆病とも申ハ陰極て陽と生し陽極て陰と生する
事にて平生陽氣なる者ハ陣中にてハ腹立てくなるへし
不覺をとるものにて弓矢鉄炮の前まてうけひさる陽氣ハ皆けと
らるゝ事と勝の本に成へく候へハ勇氣の常に心をもちな
けれハおのおのの事の我意出さぬ様にすへくも候に
是にハ龍といふものハ羽なくて天にのほる如しの陽氣の
至極を得たる龍のことく候へとも平生ハ至陰の水中に
在りて居ハ是を以て真実に武勇の心をおこる人ハ常
くの養をよく仕るへく候

一 来書略儉約にて兄事なるを人ハ用たく存候へとも少か
りさく奢ハわるき事と思ひなからもやむることわすれ
をしてとくにおこりけるなり
返書略儉約と吝嗇と器用と奢とのわかちなきゆへなれ故に
ては儉約ハ我身に無欲にして人にほとこし吝嗇ハ我身

に欲ふかく人にほどこさんは器用の物をとゝのへさ
くはへをなすは人にかゝりしかけまじへはなき分に過る奢は多く
人をくるしむる器用なるやうに見えしかども其用なきは皆我身
の欲のため栄耀のためなるは奢にて用をなさずして我人
にもほどこさず只ひとへにくるしめ百姓をも
はかりて人の物を借てかへさん商人は物を取て價をや
らぬ畢竟穿踰に同じき理をもつて奢は無用なる
ものなれば倹約とはいへども吝嗇となり又吝嗇なる者の倹
約の名をかるものあるゆへなりそれは

一　東書略同志の中に世挙ありてかたよる人の中には流俗にお
はせて我身にはわるき事とも本来へよき人にはへつらひ
てまじわりさんにはおしくいさめことに真のまじはりさん
へしはなさましとすゝめていさをいはへてよくやおしむべし
てをあらたむべしや

同書略曰人の人ごと十か八九はかならず一二とても悪きまへあらはれて
曰人は必疵あり其疵ある故に諸人はめづらしく善人は其疵を
見ぬ人をも云はずにめでて大体よく見えて其しるし取たなく
かくすべく疵といはずまた次ぎてしるを以て世挙りてかくしておもひあひなく
見るにはあられども其疵は随に弊あるよりのなる故諸人
の為めにもそも殊に出来りのかなしく見え其
疵なければ小人の為そしらるまでに全く君子
なれば全く小人のためにはわがさかす多し其謗る
君子の義にして疵なかり流其人にわざまじは此二の道
と知べし次に

来書略。我等か国にハ江西の遺風と云て、弟子餘多學へとも
貴老御弟子の内一人ならへ成者ハ
返書略。拙者にハ弟子とか若ハ一人もなく、師に成へき
藝一とてなし。故にてハ醫者の醫業をなしいく一生
の身をもつなる物ハ、みの博学をまなひて物よしと、産業
として一生をおくる。我等か掟ハ出家なとの宗門をつきてある
を持ゆへするいとのつとる師ハ、弟の契約なくて不叶事
は拙者にハ兼学なく、人に文字読をもならはくとて
ふかく覚悟なくして、何そ子をも人の一生をおくる事あるへし
になるへき事を不存ハなし。文武の徳に志ありて、要妙
の心法をもらひ侍へとも、自己の人徳の功されハ、ほとんと
こまして人の徳をもとし、道を達して門人あるへし

すひそもうるぬ事なり。世ニ名あるおよハさる才力あり、親質
の徳ある人々の志の内かかはらぬあらハ、わるてあそひ、其人に師
となし、心の色ある心法をきつくらまし、人ハりのとてありとし
ほたをする者の丘陵ふよふおよく義僕故に、あし同し
ても見ゆ多年の功に勝てよし、人えかさく、皆益友
ハ武士の歴く弓馬の藝をおし、へらうても同しにハ先
へ学く功者なる人ハおしゆらなる人におし、へらる、是ハ武
士ハ相多くひのすみ多く是も、おし、へて師となる人の恩にも
を此國のあめ天下のため武士道のきはめなる、是ハ器用な
る人に、いそきおしへ、なてこそハ習ふ人も其恩を感し
て忘さるものなり。醫者出家なとのこくに師弟共
格子なくハ知くもなきりの御つりまて志の恩をよ

らこひおのよのことなれば我が道徳の議論とちかくおもひ
は心友をえらくべからし心友なりがたきゆゑに貴賤をいは
ず志ある人には合く師とし不肖弟子までをもなくは我に
学問得さる以前より常の武士にて奉公いたし居たるに
故にしても右のおこく人くよめかゝりを仕へたし牢人
にて学問いたし学問ある者を仰ぐ奉公よりひまされ
たく存ずるは似合敷武士の役儀を勤るなすべき
身にて其上にはいへるしかしは今時歴々の武士とある奉公にお
らるゝも同前には武芸のあるは是また嗜みにおいて
のなき人ゆゑにも其上志の相叶ていは人におはず家
すをおしへらるゝはいかゝしかるべき事なりとまちめより芸
能をおしそめしてハ歴々の武士はありまじくは一向の物好き

と成べくおなかり武芸をもと成べくおなかりのハつの一道へ向くべ
心法ハ又等の人倫の内とは用ある勇気の外はかくなれば武
芸ハ武士の役儀の嗜みにて其嗜みにもある人其内にて
勝れても其れハ人の手本となるまでには手本となりて
をも功あるなる者は器用なる人を取立てはいかに
来書略 道に志ある君の時として飲食男女の欲より
つゝしむあるかハ志に実なしさる故なり文道に志なく
ても行儀よく私あらぬ先生ハつまりとどまるべしなり
返書略 心は無声無臭のものなれば人ハ見えりて見分ければ志の
あるとみる人も隠微の地の実不実不肖は又志なくても行
儀よき人も隠微の所あるべければ志なくして父母兄弟妻子
を古郷におき一旦他国に遊び仕へるとも終にも

古へに論語にいはく隠微の地とても悪道にはゆくまじと
人をしむ善に実なる所あらば道に志あらば一旦敵気の欲
にひかるゝとても終にはわりなき惑なくば敗気喪ふ事なくさう
ひとく道よりまよはぬ所をも偽ぞは志の不実とや申ても
きかし実にはまことも明の志なく蔵に知らぬ所ありても
唯今飲食男女の欲をうちて迷ふ事なり心志の塞がる所
ならぬ人は父母兄弟妻子にわかれはなれても古へなくてあらひ
より身のうへ気色あしくなり志のうへ徒に何間にゆく
まる人へ交はりて人たるのかざりしも今日のまゝは精力強くしてく
慎これ若きにあれば気の名根深くてあまりまざるもしき
生まれ付きて邪気の欲うすき若もあまたあれども其あやひなる
色欲は邪気おこらへかはるとかひて其の志ある道徳を

おし心は晴しはあきらかなく志く浅せなしともあり
慎みおとろへて乱るゝをもあり非道て異風になるをもわ
至一躰のうへ紀は無のうへになし汝月夜の志えし曇る気
と闇夜の晴としのまゝし雲あるとも雲のむへしく雲なしと
もおもむへからずとは

一 来書略此比家元かく交代喧嘩絶えおしこる所へかゝら
見ずくしかくしても志力はなしは先ずに先の若き姿
故に若人ともようまきぬはなき人は定業とも可申作
かくつまゝる者は是非事にはは非業の死と申べくはや
返書略 定非の事は不易は物して喧嘩は紀武士を
せさるあらんは大くされ礼儀のきしかとなり紀の油く怒氣
此無先にをくされなく表に事ましにまるは人為の災

く命といやしき事をいはゝかゝる人ハ何ゝもおそく迯へし
も交の雛をえんそくへもなら忠ね義理なくなるを立力あ
するならく世へたら手まてゝも其人のあやまちゟわきれは
あらしそ誠の命あること可ゝ也死すへき義理なくて
我あやまちなく非出しなん々と巌牆はあしきれ命なり
くハなくゝは義ありて死せるハこれ命なりくは是をいふ
君子ハ巌墻のもとにたゝすとハ
来書略祭礼ともハそまくの住ゟあらきよりすとかは参
地二光天下の名山大川ハ天子二是を祭給ひしそ其の名山
大川国ゟ功ありし人をハ諸侯あれを祭給ひ聖賢とハ
其子孫をゆるく祭し先祖ゟ大夫士庶人各限あらむ
なるゟ日本なとくハ上下男女ともに天照皇太神へまうて

は天子の外ハ国主としても成ましきすみてはは非礼なか
りとねかふしるにも先其非礼ゟあくさりひ給ふすとハ知給
もとは
返書略おしくの礼あるの外ゟハ神を祭らさるも
とハ利心をいとく神を汚しおゝと禁し且邪術をし
てそきをうりあつかふとあそれハ罪を天ゟ得てハ祈るゟ所
なき道理をありし情欲の親ゟ流さゝるましくひとを解
て人々の親すなんち至神至るありそる非あんすゟ事
をしきりと則非あゝ舎りして我精非初天非とも同し
仁義礼智ハ天神の徳也あくさりて何ハ常ゟ天ゟ流
る人へなきなくりる其礼を用くまつるハ福ありて其たる
をむなくくまつる谷ハ諂也其代義あり月なゝハ秋阻な

をむかし礼儀はさらに俟らずまた天神明の徳威霊験あ
てハすへてのおそくの敬をなして悪をかさず神の諭てハ
利欲をも亡ひ邪術もちて人天道よも叶ひ勤をた君ハ
臣君よも忠あり各時所位の異あるなりそま一天子より直
まもりかたまもるハ公卿侍臣のことをつかさどりそまつりごとハ
次第のつかさくありて可奏ことハ其旨をさ〻達するなり
ま〻て土民なとハ其御門内乃白砂をふむことをなせ
さる〻は帝尭ハ鼓をおきて世ひろく農工商よりも人直
ニ可申上よ細ある〻ハ此鼓をうて君あ〻く〻むしと誹すり
下あくあとゆるといふことはりあるなハ皆直にさいらして
いふことを敬ざしめ民乃今よ及て父母よりのゆるすと
くおりひありし日本の天神宮御治世のまでむかし神聖

の徳あいくよく天下を治めてまとまつりひ下民よたるく
かし御いたまたし尭舜のこと〻おかし其遺風ありて後世
乃ことかかりて茅茸の宮殿の残りたまふも同し理り
ゆき上神とおなしせらひたまふ和光同塵乃徳よて帝位
乃その時よハ違ひあるの風俗よて謙をまもりよ天道理をそ
ゆ野抔ハ今でもも聖神の徳をおふきくなをもちかりて神
宮ハをも御治世乃ことおなしもて万歳乃後までと生じ不息乃
徳明のおなしゅかして日月の照臨ことの治めて
をまたおなしいまでを聖帥よむかひおもふ神化のを
をきすくなし人古の聖王ハ君師とゆて尊さまで八君
あり親しくあらハ師ありて聖王のことおもし霊山川の
ほとりふ行ても道様よ脇ちの益すくなかし人あまきあ

川乃神霊の徳に化する故なり其上祈ると祭ると義
おなじなり天をハ天子ならでハ祭給ハざれ祈ハ誰にもゆるされ
士庶人も苦しからずと定めしの例おほしゆるしをかし
一 末書略先祖勧請の宮社を非礼なりといふ事ハ
あらハ先神道の意ハしろしめしたれは香井を入ら誠敬自
おのづから心新なり社前にむかひ拝する所に信受わ
つけ心をなすに孝養のこし先人家をそとに孝子恩恵
ほと成て天下平なる所々に勧請なくて不叶義とあ
語ハいへり
返書略なとへハ洛陽にてハ賀茂其外御社一所にても
人の敬をうけたまハらざるへしむかしよりの数々の勧請
かなしつ謹拝しをいふ勧請の習なれハ代々も天

下乃命をさしめし平清盛厳島をもとく社のは
ともに勧請ありしひとへしも美を尽さるへくいかなる
ものし西海まてもしおしく清盛には斎特
ありしよしを原廟を作なとてなにゝさる事なり昔
成まさりし原廟を作るなとも霊地をえらひて移し
葬斎よハせさるさる祀礼おろそかにもなく霊地をも撰
られさるよ候ものハ神を汚し威をおとし敬をさる
とて大なる不敬に祈りゆぬ佛教をゆくもちゆれ
塔を佛舎利のある所と知て礼拝の心をけれへさうた
めかりけれへとむかし山林にある伽藍にあまた
なるなるもわたくしゆ今ハ町屋と多くも建なるへ
て塔なとハ月なまーくたらしあまくおはし僧法師

此敬礼の心を継(ツギ)しては其上聖(セイ)人の教(ヲシヘ)ハ其親をたふとく
敬の本とせハ親乃神をあかめ天神と一体にしては此
今より見れハ至尊(シイソン)なる聖神なり他に求(モトム)へきにあらんや
むかし老(ライ)ひかめる親(オヤ)をもちたる者ありけり其子ハ親に向(ムカヒ)
ひたるハ手(テ)足(アシ)もかなはすして如く養(ヤシナ)ハすいまの親の貌(ボウ)
貌(ボウ)神なりとやく死後なりへ仕(ツカ)ゆるまうへき命なりと
其附子説(ヒザツ)に慎(ツツシン)て見れハ家の福神ハ父君にて有へ
し備しはつかまつるもし誠りすれ故に福(フク)ていまし
生ことも如くおそしまへ故にそとかくして妻子(サイシ)ハおも
養ひ父へあいつまてもおそしまへやこみし顔(カホ)ひはなり
老親(ラウシン)衰(ヲトロヒ)く云用(ヨウ)にハあすして人をつまみをおしへ是みる
くの好(コノ)みおしとまり我行ての貧乏(ビンボウ)神をなまりに福(フク)

神とハ何としていふそと子それ曰むかしより今にいたるまで
多くの願(ネガヒ)をかけて難行(ナンギヤウ)として神仏にいのりの多くて
此人も福を得たる者一人をきかし親(オヤ)に孝行なく神の
福を給まつり君のめくみを得たる者ハ倭漢(ワカン)ともに多く
得たるに同の前にあるしわる家内の福神にハ福を祈
られしてあるまもなく同事を見てぬ前にハいのりは親
に孝行として福を得ることを害(ダイ)わるし神仏にいの
りてく福を給さる乃ミならハ其損(ソン)多くは今我福神にい
でさる御仏わる故幸(サイハイ)なきこそやし願望(ガンミヤウ)をやつしきて云
けまたこ時老親(ラウシン)うちうかつるて得心あらぬそましまら壊
僻(ヒガミ)をやミいかり腹(ハラ)を行る乱し家内のものをつかへ
一　東書曰　庶人(シヨシン)の父母にハ男女の侍坐(ジザ)あらくつかふる者多

此故子なき老夫婦ハわつかに養を取はたらく一二人男
女のめしつかふにハなるへし人をも農事を務め食をなし
かへりかしこくすれハ過活さつかへなきにあらす其上定りたる
家なき禄なき故ハ不用を節し身を活て立して父母を安
しなふをしく孝とハ是非も古来よりの人ハ定りたる
家禄ある者ハ養ふ事ハいふに及ぬをまして卑妾あるものハ猶
夕氏給仕の心やすかれなとみにふ家なにほうなり
を及をれも先れ仮く小道を行ゆえもハ父母の養ひをも缺
あま父母の心安して氣遣もなし且祭祀ことをこそるを
和し是故に職分を務るとなく孝行としてよろしきを
ゆりはまおとにさふやうになくて不叶事とねはたらなり
文王を門ふる父母につくへ給ふわくくなるいなし

一 返書略 老事一度と又時なりいつとさやうなきれなるへきを以
くすなかの秀なるん天子ハ天下を頌に其孫なる親孝
すなり諸侯ハ其國をよく治るか親孝のなり大夫の
政事を任して私なき故親の孝なり士ハ尊徳性道問
学なり親の孝なり農ハ天時をおやまさし地利を精して
五穀生長さるか親の孝なり工ハ職を上手に成とめ
商ハよく財を通さるか親の孝なり各事によりて
家をつとむる人ハ皆親に活りすなるの孝なり時として
いふ母わるいハ父母のわさりに從ても叶ぬ者みんりして親の
身なり古立身行道皆親の立身行道なりて子の名を揚るといふ
へとも父母ふもみなれ
一 來書略 論語の前章文理ありまし通しともいへとも心り

ちくさざる恥あるべからし
返書略説ハ自家の生意なり境界の順逆によりて損益
し楽ハ物と春を同じ一体の義なり不慍ハあしく只吾徳な
人の不知といふのことにあらん忠臣と不忠といひなし直を
不直といひ信と不信といひきらのことなくん流罪禁獄死
刑にあへるの逆も人不知の内にありて泰然として人をも尤
めず天をも怨みん寒暑に霍乱して死する事もなく拷
害に吹雪にあひ命なからむ事なし天道の陰陽人道の順逆も
義一なり悦楽ハ順也人不知ハ逆なり人生の境様くあり
しかども順逆の二にも過ず小人ハ順にあふときハ奢て逆
にあふときハ怨しむ春秋を喜しみ夏冬をうらみん
とおなじからし君子ハ順にをいてハ物とあらし逆にあ
へくハ己となりて春夏にのびて秋冬にとさまるがごとし富
貴福沢ハ春夏の道なり貧賤患難ハ秋冬の義なり四
時ハ天の禍福なりして禍福ハ人の陰陽なり屋の南面ハ夏
涼しくて冬温かなり北面ハ夏熱く冬寒し人
の南面ハ我北面となる所を並べ生をよのれして世にす
むものの自然の理なり富貴福沢貧賤憂戚相ともな
ふ世の中なり誰をかうらみ何をかとがめむ

集義和書巻第二終

集義和書巻第三

書簡之三

一 来書略。性心氣いかゞ見分べきにや。

返書略。太虚ハ理のミ也いへども一氣なり。理ハ氣の徳なり。太虚一氣の屈伸をもつて陰陽となり。陰陽八卦となり。八卦六十四となれり。これより流れて一理万殊に及び。盡ることなし。次天地万物の理形をなさゞる理をこれといへく。以て氣ハ理の形なり。動静ハ太極の時中なるを吾人の身よりしていへば流行するものハ氣なると氣れ靈明なる所を心といふ。霊明の中ニ仁義禮智の德あるを性といふ。霊明といふて氣中別ニあるにあらず。次氣ならずして虚中の妙乃まこと。虚中なる所ニ至て明かなり。

照(テラ)させし明らかに小よく照すと云ふに條理(デウリ)あるべし

一 来書略 死して後此心はいかなるべしや

返書略 冬(フユ)になれば夏(ナツ)の帷子(カタビラ)をたゝみて心なし 夏に

なりては冬の衣服(イフク)を見るに心なし 此形あれば其時に形の心

あるべし 此身死しては其の形なれば心なし

一 来書略 志ある人は顔子(ガンシ)の死後も盗跖(タウセキ)の死後も同じ

きや

返書略 此性は形を生じて形のために生せられしも

又形の死せし為に死せず 悪人の心体は今まで

て性理を失ひ死後も迷ひて 善人の心は今より

志して形にて役(エキ)せられず死生を以て二つにせず 又死後

迷ふまじ

一 来書略 世間の人何事もしならひにて信じたる事を信

ずる人はいかゞ

返書略 なれはまとふもれ共ハ迷ひの心定見(ヂヤウケン)

なき故に末の邪正(ジヤセイ)を弁へず 考(カンガヘ)て心術をよく握(ニギリ)哉

わりてさる事ありぬべくいはなせ共はやくよりかゝりて

信ずる也 君子の道をまもらんとすれ共 それに性命

になりつきて 善を好むなり 如何にも是に従ふる其

たゞちに天に飛(イニシヘ)らまじ

一 来書略 忌見清存志のまゝ仏法(ブツホウ)を聞き慈悲(ジヒ)に

至りて後子孫に至て仏合わしかば此は成故に

ておかれべくしや

返書略 人見てもうつされる事を天が見給ふ事に迷ふ人

凡て〈よ無きと云も天乃こゝろしよりさるゝあり貴賤
を見るにはよ愛情をありと見へ行儀は随分正しくは
下と云作法の正しきは生付よし学ひよりて須も情も
婦人の如にみて人民をとめくむよこも須はなくおほし
てもく恥しかるされ者みはほしたしあら此雑儀を
も知らはされは此とをよい百姓なとゝ水籠よ入なとし
て疎付せる者と云しより罪なきこのこにあら須貴賤
賤類のを却て恥しめられは其毒子此歎き不
罪の人此いろみ天地神明とうとかれは悲しく須こいそ
も其天職をとすき天職を汚しまさるなりゑらくせ
は不仁なり大小によつて須罪は上一人まつ子以今此世の
習ひとも雑儀させ百姓をといさむるものと思ひてとう

しかれは人もたくいまれなる行儀よ然と姑息の如とをみて
人もよしと申にへとも天の鑑明らかなれは神明の罰よ
あたり仕合あしきことになりますには

一 尊書曰愚兇事あり何にて通むよ存しあらす愚兇は
姑息の如なりとも治国は作法あり其身不仁無道にて
下をなやまし民をくるしめは人よ子孫もしさう仕合よれ
わりくきはめてよれ人も仕合悪きはいかにいかく
尊書曰人の氣質は天地神明は福善禍淫とうくる
うけおそれありもやれあり志ものゝ為に須此人根の造化
の功と助無れありさまたけたるあり運氣は勢ひ
繁冥強着あるはおとしかんは聰明の人よは若よ福
くて悪よ禍また是やうなる愚不肖よは善悪り

禍福を我し平生我の合点ハ遅速ありてこそあれ
なり先祖の造化ある神工を助るものハ勢ひいよ／＼さかへやます
さるによりて子孫あり／＼もたまつことも仕合より先祖の造化
成就するもの子孫ハもたまつことも其逆命の勢ひいま
たおもりしにより身に頭痛の病あるも人ハ五用八千の気を
感ずるとをもしむかしまてより下流ちさなくのしあり
ようてきてあたくハ
旧友にあるにし書に曰故者ハ其故たることを不失此
より人ハ字音問を絶る／＼すハ無情に似たり伝聞
きそ道徳の勤にすまし給ふとたゞいふひて愚とゞう
とゞ給ふの悪を見たとしてそれをおこし給ふの学
裨益なしとして道徳をなし者まで遠ざけて給ひて

是非に及ぬ深き悪心を不肖なりとして捨て学にまよひ
さうり給ひてあやまちたる也故者ハ至情を思ひ給ひて何
事も過ちを改めさとし給ひやすさとしてあしらひまじく
ハ悪をすて道徳を尊信し給ふを為すにハ必ずと
身を正し候也何ぞ人にハ天下の道の信不信あらん聖
人の門にあやしき人なくハ天下の聖学をも必ず人これ愚人
不正なりとも吾聖学によつていよ／＼いたはりなる為し
身の己の定見いのちとこれ為なりて人によりて信を
まし信をおこし給ふハ道をみちの人にある[illegible]
一 本書略世に判官贔屓といふハいふれるのみにて[illegible]
近書略[illegible]三[illegible]あり其功によりて貴とき
くれとおほき者をぬく富貴にして驕れる者とす

乞こし上に居て下をめぐまんこゝろなき者をにくむ判官義経
は其人がら道をしらず勇気によりて奥ありといへ
ども大功ありて威をふるひ人情のあはれみしらざりし
頼朝卿福分ありて天下をとれりといへども不仁なれ共
寛宥の心あり人情のめぐみあらむよし頼朝判官にかへる
為なり然驕ハ天道の虧所地祇の亡ス所人道のにくむ所
なるし謙ハ天道のます所地祇のめぐむ所人の好む所也
一素書略我おもはずほどに虵を神の使者なりとさだめしき
まどひをなせ次ハさまざまの乱れとなるゆへ其上害
をなすはさまざま其真通にまどひはべんやぬりはべんか
分別定むべし
逆書略神慮にまかせて非法を役めずしてハ神の
敬なきこゝろなきに時にハおそりて何によりともものゝつたはるを
疑ひハ虵を使者と定へおよふあらし次且虵ハ叢なりすむ
ものなれバ人へ居によく悔しけれバ非道にてハ神明ハ非たるを
戒じに為べしハ虵のもとむ深草に用心もなく行て害に
あへバ人の非なり人のすむ為によりて虵のとるハ虵の
非にてもなく叢によりやとり行ざれバとハおもひ殺して
可也なれども愚民疑ひあらバ崇ぐしどもりて神慮
を遠ざくべし許訟ハ正芳に道理あるハ浅々
ものなりていはるゝし一二度にして神同心なくバ一
重はて浅々ても崇べどもとりてよつ
神の冥同心なくバ次其同心有べくバ真外なくおき
かつれ為べしかるを次冥同心有べくバ真外なくおき
たくひの神慮に叶ハざるのを神慮としてへのそる

などゝならく含歎に叶ふれ様なる事多きは
一 来書略無学行ハ段如無燈夜行といへり去れハ貴老
学者の段も心得らるへしとの給ひ又其筋目あれハ人々
其借りにあれハ人よりも恥しく思ひハ心得らるゝに
返書略段の事あれハ人を其才とにハ其人ハ学者にてハ
国天下平治仕ハ其才あるとても学なき書きハ政に我
甚まされし者なく志らく行ふふしくまてハ絶えきとも
わするゝ流ちる取るたる故ありきハされ前後左
右を見ひらきて自他のそこらきハなし候ハ又才
知なく志らく学あれハ人の段をすれハ盲者の昼あり
くらくまてハ闇夜ありきハへとも不分明
に時所位の至善をこゝろへよ様なくハ不自由也

して是をかゝり見ても法しても書くとも書くと
ハ見てわきまへハまさり可申ハ軍法志らても勇
知あれ大将ハとの行かゝ勝負の利ニ迫しハ敵に
逢て勝あとしてもしハ軍法ありても勝負の利かれ
き大将ハ敵にまけて計方なくハ勝負の利なき人
軍法を知りて名将たらくハ軍法ありて名将とハ
成らくハ才と学との道理同じ事にハ古今のため
明白なる事に候
一 来書略経書をよくとハて学文なりとハ兼ハ稀
まはくはとめて見申候ハ書をよむ事決しても不叶筆
にいつく老学とひいと無なくハ只ハ成てゝ見るにハ
返書略聖賢を直に師として書をよみて大道を

知徳に入ると成りハ今の時聖賢君師なくといへども中人
よりも以下の人ハ書をよむにあらずしてハ道を知りて成りがたく
いたつてましてもよく心傳を得たる人に聞いりて吾人とも
成りべくハ掛るによき士とりほどの人にもうにハおよぶまじ
まして聖人の言語にハさまぐ〵むずかしく無拘の体なり
其含むむずかしき言語によりて義を經書を見て聖人の心
をくみとりハ則聖人に對し奉れりおもしくなるらかんや
其心にハ深きもあり淺きもあり其所以ハ情ぐしかさく
いへともいかさまに書を見る人ハ淺きにてもさとにあ
こだわりなくいゆくに前語にて心術の事を聞て人ハ一真ハ
すこし也とても言外の理を知りいつて心あらハ淺年識
得てたゆむもあのゝのては中人以上の人ハさかしく心傳
彼聞てハやうて天地を師とし造化によそいて学ぶ所あり
然ハ書をよむに及ばずして道を行ひ徳に入ひなると中人以下
あつても書をよみえたるところにて心傳を不聞人ハ聖
学にハ叶かたくいはゞ上智ハ心傳を不聞して書を見ずとても
多くよく徳を知りいなり故に攸好徳ハ幸福あり然人ハ淺智
を歴らく徳を知るべしと雖以人ハ書によるとて聖人に
對面仕は書をよみ路りてぞ人の主人ぞうして仁君
といゝまじ人の路うして忠臣ともいまじい淺きにより然
士となりて善人に叶ぬといはれものそのかへたなりかべし
必ずしく名を後世にあらハすべし
一 東書曰三皇五帝三王周公孔子ハ同じく聖人の義
ハ伏羲ハ文字を教学をかきし時におそひて初て

蚕を飼し天下後世道学の淵源となし給へり然
孔子孔子の八末代に治め孔子を学ひ給ひおさめ筆
の三皮をたちまちて朝夕これを読み次して以て易
伐得たりと思ひ給ひ又神農は草根をなめて始て
医薬をはじめ給ふ所なるに孔子は末代医術にあまり
たけ給ふ生まれ給へども薬をば遺せざるの語あり此は
すなはち太古よりひたる道を同じとはいかならんや
道書略時まては孔子を伏羲神農の時にとれは
易を作り医薬をたしめ給ひは伏羲神農と孔子の
時に至ひて又孔子の書とくまでは

一 尊書略尽して仏説に似た事にはさとまうすらく
神通方便をなし給ふことくに空くとして治なる
ものとたに伝へまとしるへの文字にまたさりひて是
人とひとしきはいや
道書略おしも心はなくは三皇の時よりそて八卦
よりて治なきことは色おこりは心せん感ある道理は
孔子の時には道あり孔まんとこれて学の心の理は
上世は大極を根とし天地を父母とする事に近し聖
人生まれ其名残らは次まとひたまふまして明着なれ
不孝子なきをましてす孝子をたてろ只不忠なきまた
忠臣はまた政刑なくして大道行はれまし教学なし
て人これ善なりし治世によりて性情よりまし物欲
生しぬ人も初てよくひあらし頃時に当て伏羲氏始
て側隠として感慨あり教たり此おしてか只此時に

天道龍馬を命じて文を作らしめ其志を助給へり書契
敬学これより始まれり伏羲氏に於ては物欲にさそはれ情
性に合ざる故に人々病疾多し後世有欲多事の
ことを預見て是を救ひ病人あれば醫薬の術耕作
の政なくしてはあるべからず天道霊草五穀を降して
神農氏の業を助給へり是皆神聖廣大无辺の
緒餘なり時によりて教をなすものは伏羲神農は其
外は周公孔子は其のごとし其模様はかはりあれ
ども同じく天理の神化なれば一ッにして易は無極
の理なれば孔子のことにいつも伏羲といふ是
のごとし只ひとつに帰する所なり聖人の理なり
衆書略釈迦はえらびたる聖人の是も時によりて其感[?]

まされ法たりしか
返書略神聖中行の道理に於て只中國に来らず
孔子にはひろく聖人とかけて其分量あるは仁心
廣く厚き所あるは知勇の氣質に備つて凡そ
あるは其生國はことに愚痴にて大に欲ふかくして
不仁なるは極難の國なれば死せる肉を悪くし
いはるゝ持ありきさ切てるゝのなるは仁心深き者
是なを制しがたき方を去りては殺生戒をいましめしこと
有りけるは日本は仁國なるは此國に生れたらば佛法
を学ぶ後へさきの感歎もあれまし然に若又釋迦達
磨を以て今に出して今の佛者たちを見せなば何者と
も心得可きるべし佛祖の流と申して大に欲深き

されはひろく其破却をきりあれはまりしかは我ホハ佛者
あつかれなるに遠慮おほくなきものを根もなき須は我
子を教戒ともれ者ハ至情をのべ人の子を教戒する者
風諫ともれくおとくまては釋迦達磨に我ホ凡佛
を雜もる語を聞せけれとくいまきの世情とこれをとと
道に専なりされはなほ遠慮あるべきとて心にあれ
中まりしけ

一 未書暗俗は貪ハ世界凡福の神とやれはいはれなれ
理なりとはや
近書暗世の中の人随ふ須留はなく天地も甚だしは
きしきかへ貧賤なまれハ多く五穀諸菜を作り衣
服を織出し材木薪をきり塩をやき魚をとり漁
網をおろさたとひ仕ふへき士肩の炎暑をいとはす須植田の
勞穀を憐て塩勤野菜なとをもとむるは須留にて
仕へくはや農工商も貧ならはおこりて世の中くるしむ
ちはたく農工商のこゝろさしるはあれは須士とはへとも貧
を常として学問諸藝を勵み才徳達しはせ世よ
なるゝ栄耀なる者はたはくハ不才不徳にして國家
乃困になちらさくは唯士農工商のことなく須國天下の
大なる國家のことといへとも吉凶軍賓嘉の礼用をなさへ
國五水旱の蓄をなし君に奉ますれるの役義なまれハ
富足おとしあるへからす須上ハ天下のことといへとも未来を憂
して往を厚くし天下の人民の生を粘ひ死に哀しまて
けしなりしかし且異國の不意に備へ天運の凶年飢

鑵をあつかひめ給ひて天下の財ものおほきをも天下の人の
為めに御施す事ハあまたありけるに其上に天下の主
たる事一に無しくおほしめさるゝハ賢才の人のすくなき
堯舜も是を憂へ給へり是以同じ心なる聖人
なる事と之孔子ハ人の師なる事ハ知恵を明らかにして是逢
ましひ堯舜ハ人の君なれも知恵浅くおはしまして天下
の賢才をまねき給へり宝ハ貧に生し知ハ謙に
明らかなれ理をしりて我知に自慢したまはぬこそ是
ぞ天下の才知ともいふべきなり空ことにて
謙退なる事もおのれ善政もおこり義風も後世より
ありてなる下問を恥とし天下の知を不用は
その身体ハ虚霊なるの理にあらず其恥にあり

されどもちて恥心といひ不善の名を得ることのなきは
なし天地の大なる万物を造化し給ひ以て広大虚無
一物の理なるも同じく多く成しあまて多くを辞へ給ふ
無味なくしてよく多くの味をもちひ耳ハ無声にし
て多く音をきけり心鏡空くとして万事に応ずる
物ハこれ虚より生じ正しく貪ハ世界の福神こゝにあ
古語にもまよへしよく人心の霊にそ以
書曰嗟まひハ堯舜の民を貪心とまなぶことや
逸書曰嗟まつまるハあまたのものし是にすなくいつく
命を安して頓なきは身に労して心ハ楽あり堯舜
の民ハ康寧に福ありとハ誠理にていむ四夷あ
まで毎日ゆくにむかし礼拝し清福を得るといへり其事

簑て日軒には草をきり床には稿の席をしきて身にまと
ひくさめのことをいそ雑穀を食とす夫は田畠に労し
婦は食事にいとなみし餘力あれば紡績織紝す
妻より冬母もより具よろしきにおよふ是を清福とい
ふ誰か福なくも夫々曰是は賤男賤女なりとおもひて我
身上らふの衣ちがふきにもあれ汝をかへりて賤の子にまとく
賤の事をよろ賤の家と思ひし賤の食を食し賤の業
をいとなむは天理の常也好事をたかねには汝思
ひかぎぬ幸は其願によろし汝身によるなく事によ災
違ありして賤なきは清福にあらく汝やと人いひけるす
わり流水は常に生てたまり水は腐るく死ぬ程にまた
虫入鋤の柄に虫いく汝俗楽の遊る憂又ありてこりよ

なくなり柱もしなむものなるしと遥とたるし是は美
おそれもち彼田夫の麁飯をくらひ淡く瞭なり家
のまとも寒さをしのぐむしろ賤のぬのこにまとれつれむ須く
窮若よろしく汝或は夭死をとよく思ひて願ふ所り汝人ま
動物なるは上天子より下士民にいたるまで奢逸を惮り
めともなれは人の為なるもむし許由は賢人なり其身は
農夫にして彼と同し堯の天下を辞して耳を洗ひ
しは其心の無欲より四海の富貴よおえたり徳なるの
富貴は浮へる雲乃ことし天爵は万歳に至る也又人いへるす
あり桀紂も中国の主なりし四海のそる位なり其富
天地の間にならびなし顔子は無位無官にして衣食に
まき食なきくなり志々も三十餘にして天年かこきり

あるひハ人生れ福庭(コヽ)よりうけ得ることハなけれどもさまざまに
人あるとて桀紂(ケツチウ)に似たりといへバ腹立せざるものなし
天子たり富四海の内をたもてども暴虐の人に似た
れと云て腹立せらるゝものハ人々悪を恥善を好むの良心
あるゆへなり又顔子に似たりといへバ中心悦ばずといふこと
なからんやされバこそ謙退せし天子諸侯の富貴ならぬといへども
其言ふことハよそにてくちおしく人爵ハ其世にかぎりありて樫(アテガヒ)
の実なきのあるべし天爵ハとこしなへにつきる期なし
かつて人爵にハ命分ありて願ふにかなひがたし天爵にハ
分数(ブンスウ)なし心の位たかきハふせぐものなし心のまゝなり
と奪(ウバウ)ものなきまゝハ人鬼とも不安し吾人まさに顔子
の徳をねがはんことを務むべし桀紂が徳たらんことを

務めよからんや次
一　未書略無欲乃によれバ難をなす所謂道心者
なりし八無欲をたもちたらまし以て世間に交居いて八さ行に
を成るよれバあにて以て又奢八わかまさにもなる人のする
ことをせされと各嗇(リンシヨク)といひ天下の内に人なきに仕ふる
欲有てとり得くいふとはまさに八ならず次いひて
かれこれあるまじきや
此書略まく曰無欲とハ何ぞや心得ることいや天理をもとめて
人欲につく人欲をはらつて天理としそれのみやすいこと
となれバ物を蓄へ(タクハヘ)得るハされとを欲せし蓄ふ一次して有
欲とは是ひたくなき八何事をも欲せず居を無
欲といひ居をや其己川ハ志わきと正体なりとて

又人のまじはりをせられんとおもはゞ数奇(スキ)者(シヤ)にも
茶の湯をもちひ又ハ謡(ウタイ)もうたひ又ハ乱舞をもし馬
をもならひあるいハ其ほかひとしき傍輩の人々と一座せんからは
給ふべくハやさしき様に仕ふ人ハ皆まことに其家の芸(ゲイ)を
稽古(ケイコ)するにハ其師の所へ行(ユキ)て前方へ招(マネ)きなどして一
芸はいさぎよくしれずして只今ハよき様にすべししかもなほよ
いかにも我心にも叶ひたる人々と五人七人うちよりてよく
稽古をしてかくらいまでかまはず其ハ五七人の内にて弓にすぐれてあらバ弓を
もしてわれもわれもとしあひ鑓(ヤリ)太刀(タチ)鉄炮(テツパウ)馬足ひくにいたるまで稽古を
謡も茶の湯も酒も連歌(レンガ)も文字も人にまさりてなりさ
まされハ様子のよろしきこともまた人に着しあるとも見てハ
大身にも大勢の寄合小身ハ座敷もなくつゆはずくも
なりをまじへて五人七人よりあひつゝ其中間の人各当とり
清白なることの名をはきとゞめもかならず世間の人
も聞伝へて中にてもいひあひよ一かたならずいつも一座
よりあはれとりわけハなくいかにも三綱(カウ)五常の道を修(シユ)
て其身の作法正しき家内の男女をよく教へ
馬(バ)軍役(グンヤク)に應(ヲウ)して知行の百姓をもはぐゝみ
ら次にいるさ次来長もよき様をゆるさず
まじはるにハなべて文武の芸をたしなみ次世
間の着にひるまじ次親類知音相當のまじはりと交り
をし次屋作をかまへ家職をはげみ次流行の具を
たしなみ飲食をつゝしみ費(ツイヘ)をやめて有餘を貯し
親類知音のおちめをすくひ家人百姓をあはれみ

昼夜文武の務に暇なく世上外見のあらそひハさらに
かまはず忘れてあられぬやうなれ人あらハ世中にハ
正人あると類すくなき事を成するよし用とも節せ
ず不時の備をもしを誤まじと無く欠ぬ様にし仁に
も義にもおしおく誤しても人なく流ひ施しをも無欲
ともいはんやそのまゝハ名根ある生じて欲心のいひと
きにはあらん是非ものたるを欲心あれ故に人の各嗇
といふ名をいふとて清白までぞとする中ていは真實無
欲の人にハ清白もなきあまていは真實に無欲なるまゝ
しん人が各嗇なるとをいふへきよしの氣遣もなくいなよ
心も流くさ家屋の義をなされハその流々倹約あり
衣服諸道具飲食のなかなるまゝハ自然と略し無欲無

心乃倹約なるまゝハ我も肯も使人をとりたる漢法の主
人といふへきなり其後ハ無欲すゝは身代もはつてく
いくく世にある務をいりかん人なとゝいふ事ハ其無欲な
きハ身代ハはずかき世にある務もしおく威のすよは番名
湯の欲あへきハ陰の欲なりし無欲をはくすれて名利の
欲也三ときもは大欲心にていは君子の無欲こいふハ礼儀に
そうたるへく私なき心也如此の正人あらハ今此世とても
あしきハ下る家はたらひ無ん得なる者ありておしき
ドとぞもおへりてさるゝにいは天たを我心の訛擾人とせ
らるゝくいは茫遠國の人語らまゝいは立派に奇特なる
者あり知行五百石の身上にいは親類知音にあらぬ根本
ゑハ下くすまていは他のん公役軍役をはしらめ人馬をまま

音信を仕候ハヽやうしくる事も有之候倘書中尤もらしくも之乃
文面ハ別て候得ハ其上にも親類知音中折節之挨拶
なども無之様に心得候て其外不足なる事候ハヽ町人乃
常々おろそかなる様にて如才なき様に心得候て親類知音
中寄合て町人の相を取て飲食するにて候親類知音
音信心安き中なれハ相応の事をも申入候て其返礼
有之候ても互に是非を以て可申候事ハ振舞致し
し候事ハ無之様に候て互ニ身の上の常々を以て
倹約して寄合候得ても兼ても可仕候此方も有
餘る事ハ無用に候我等の流にせらるべく候ても親類知
音中用有りて参り候ハヽ語なく候時分に候てもなく
其上平生の飯と振舞倹約して寄合時分を見る事

雑水の外に仕候奇特なる親類知音の事に候也
其に心ある者も感して申由にて候
未書略相者せる事肝要に候ハ
以て世間の習に入りて氣隨我ましく道徳を損
候へ藝ハ根に不入叶ハて父の非を知らす候得ハ同意の非を
以利口にて其身の行儀ましくまなひその奢を仕候ハ
不可聞にて候いかに仕るべく候へども
遍書略一朝一夕にならぬ事の餘りの年寄共を参らせ
ませ候て其子息の家にいるとも又ともは
心根よ仁なる様にて常ハ厳なるやうに候人生ハ水火の二つ
ある事なく一日もなくてハならぬ水火の仁にて大なる事
なく候て水火ハ厳なるものなれハ人をも手に用心仕候

故に火に近付て死するものハすくなし水ハ柔なる故
人ミな心やすく思ひ近付て溺死するもの甚多しいさゝか
の病ハ柔和なる父母ありてハ柔和なる子ある人の恩をしる
ものなれバ根よりつゞく其門より不孝子いでて其國に
不忠臣いでゝハ厳なる父親ハ無理をいひても子も臣
も怨ミざる也故にいさゝかもしめやかさをあらまても
天下の人に従ハれ親よりこひハ柔和なる父親あれバ
理ありても子も臣もうらみいハいでなさけ恩
あまりて臣其無礼をせんとて臣下たち共只ハさる
ものにてハ親の柔和なるハ其子共あなどりありて父君の
柔和なるハ家中の風俗あしくなるものよハ水の仁ハ母の
ことく火の仁ハ父のことし其故ハ母の仁に似して治よ

恩ありと成候ひハ今に至るまでもしかゝるとは
いよく戻てよりハ有まじいハ國を政の政を起
臣も家はおこりたれ其行の下女は罪人おぼえて人
多く死をうけぬるのよしハ又君子たる者ハ只柔和にて
臣子もしたがひそれ故よいハ神武の徳ありてよ漢高祖や
水を火劉の書をよみて徳をきさる者はその徳を以て后
民にはやくやうなる一度大に威ありてハいよ
後今より火の仁と成もしくハ水の仁のごとく
徳を損ずべからずと云

一 来書略 雷ハ何故へおちいかんを殺計いつて誰をたす
るにハ候とも合点いかず
返書略 雷霆と申ものハ悪氣と悪人との為り

反悪人あり次して悪人の位を改むる時は海とひあれ
故よしは留都ハ物の留滞を通ずるあたるなよ雷をやまて
さ氣血流行し於毒の氣をし薬を服用させてこれなり
を心地よ於もののよひいまこなるさくのはよ切さるせ於
こいせたとへハ盗賊いましめ於無よ無自ろを於し過毒
をおこさしめるハ常人のためにハ快くそしい出づるよ盗賊を
其いましめを関てる時をもしい無く平生心よ悪ある
於よ雷都をやすてれ抛ろくまてい

一　来書略聖人よ善なしと申ハ其孔聖周公を善
ミ於れの語あり両極の間よ到らるゝの善あり
返書略無く世俗よは言て善といへり是善よあら
を聖人の心よは正思あり求気あり周公を善見於

ふ六義孔正思たり両極の間よ到らるゝてハ数の於と
今日吾人といへ其聖人よ同じく尽ら善なるさるゝ時あらと
七無孔りのハ常の産たせをまし其常々んあうと盗をせ
於れの心うて死よ至るまて衰世須学よ同せさまし之を
細かるうまし真義を精く習来たる於く志う於れゆへり
盗を志うるといへ善なて終よ凡人を出の一ハ聖人と同
し同思をなく善をあし致ゑ於させるしや昔よ至
為を格ての功なりとも盗をとしてハあらうまへんへす
と恐まこてせさるたとへまて恥の心うゝ守ぎ着さて時
あり須欲をしる今通ぐ乏有一しきうてし善るし盗を
志ゝくおつまニたとしく又ふうへうまニ無えなとしく於れ善も凡
於るし常にいはつねるをもし善まハ凡人於れたまと云

大かた其類に觸たる事を見るへく車に乗ものハ氣穴を
通たるを云義ハ見ちかへ有へからすとなり
一来書略人の身の心中にある八萬の氷中にあるか如し
此心より出て身生するは又身の色と成と其はなれは車幾
億くもの者の車を作てのれりやうし作るより人の天地
の中にあるそれの腹中に心のあるかことしと作らる
は心を内外なし腹中よ有と一偏よ其気なりさるか
返書略天地人を作りて又人を作とは是を以其天の作
られの理をそれを人の性命なると人性なりと無極や
天地を入るへく大なりとせ此為よ人を天地の徳神明の
舎と云や此心の臓の座中をのみ一太極あると又
腹中にあると云と害あり此心よ内外なき事を

なるかとの義たるへし
一来書略臨終の一念よく命終る時の心持を尋ぬる事や
するかハさしありへからすてハや
返書略細工六流く此月人の其理に持ちたる者
きも造化を輪廻も見えて生まれる其見ゆる生
一念結ことするへく緣くと死たて後其一念を
可捨は只ひとつをねるまそてあと離れても何とうしてさ
様の事成はなんや其上直の心をもそれの義と此
直一月悪事とおいは悪事を前よく寝さまに善
事を思ひはいとも其心のまたかれ作善念は其の為
とは此まても此臨終の実事のうそを前よりてハ見ん
心ましくは誰も直か其理よ惑ひようす者ハたく

は目さめぬれどもねつかずして寝(イネ)ば何の心もなく候
生死も終身の昼夜のごとく昼来れハ今日の生死
なるべし生死の理も昼夜を見て知るべし常に眼前
にあれば終るとても無別儀は薪尽て火滅するが
ごとく寝(ネ)たる時心なく寝入が如く何の思念(シネン)もなき
なく只明白なる心となりしにや

一 来書略 昼来れハ道に通じて知ぬれば生涯(シヤウガイ)の心が
をえしまゝに鬼神の境界(キヤウカイ)と可成候や

返書略 生て五倫の道ある者ハ死て五行に配(イ)すべき
死をしらざるべし明(メイ)にハ五倫あるとは幽(ユウ)にハ五行あるべし
明には造物者(ザウブツシヤ)と友となり幽も造物者と友となり生ずに
は人心あるとも死なバ人心なし　人の字は心々と続きて

明白なりと知べし

一 来書略 大舜の故事(コジ)とのべ給ふ事も孟(マウ)子(シ)に見えたり
異なる儀ハいかに知れるにや

返書略 孟子に語勢(ゴセイ)を知れハさき故事ハ孟子の
語勢ハ其の虚(キヨ)実(ジツ)をとかく論ずるまでもなく道理也
帰なく道徳を発明して給ひしものなれバ不質(シツ)
妻の時たまたまとて天子の二女を娶り翌(ヨク)日(ジツ)に孝行
ひしつ庫(クラ)をぬり井をほりしむるやあるべき
我とひとしく賤しき者を殺して父母にそむき
といふなれバ忠孝の理なければ義の糟粕
至り若此事ありとても是無徳にして論
なるを不告(ズツケ)して娶(メト)りの論ハ若後世不心得なる訳

ありとて若く同心なく無しき者あらハ子孫相續も
孝の第一たる事ハ不孝にして罪ありて色くれしかし
君の礼をも不用ふとハ小節なり子孫をはきく人の大端
と立ぬハ大義たる事ハたり舜のかより情欲の父
母に従ふ人ぬ決して性命は父母に従ふ人ぬひし
孟子にいはりて明かなり瞽瞍の本心ハ舜をてかるれ
舜れの本心たり天の命たる事ハ愚痴なれらすとい
ともせられなまふみもおしのとも恩なるをまりなり
をせさることとむひそらせて同くたるさ時をまて色ふ
れも舜のためにし心よりいきれと一向初めからし不告
て娶ること詔あらし無れなるへし大舜ハ如此の慮
慮あらとも竊に告給ふまじきものあるへし

一 孟子曰大王ハ仁人なれともえるに貨を好み色を好めと
いはれハ如何
返書曰是を孟子の語勢なり國に三年の蓄な
き事ハ國其国にあらす決して凌世の人の己のために貨
を好くりふ貨くハたらくして國人のために積置るる
まて以國の一年の費へを四にわけて三を以て万年
を遂し一をあまして兵革水旱の備へハ天道の四
時も冬一時を不用あらく貯となるのあふしら三年後
て一年の餘あるし九年後て三年の餘あるし糴りて
をさ干飯のよくなきるきへまさハ賊さよ入りて
たと仕に如此なる事にて異國の兵乱あるとても四國
よりて危きことなし水旱は運にて全くへとそ

こなつ須盗賊おこりて須國人のためよ貨を好くこ川
うく此為めよ好よあらん後世よハ貯まへとこ川う
乃たる是為くハ久たまきハ多くてこ飢饉の用ふハ豈
大明の聡甄よとられたこ國よ三年の蓄田あるとし
故飢饉よあきて盗賊おこりきとやうて兵乱よ
成てれねよとうきこあり國よ三年の蓄たるへハ國其
也よあらされの至言明かなり又大王の多くを好こ方よ
ませあら須めし好こ給ふよ老ても大王の時乃ごとく
婚姻の礼を明らかにし事物を遅くして男女時を不
失三十の男ハあらく須婦をむらく二十の女ハかあらく須嫁
せる様なうらハ王道よをいくむ重こさるたり令府
王多を好ますとこ大王の如くあらハ王道よさ

まつるきなしとなるも
一来書曰孝子ハ日を愛しくれの道理事々い
逸書曰孝子ハ父母の命を愛を須といふなるハ父母
己を為れしまさむる時ハ為ありこ時とあきむる時ハ此と
む今日此日ハ天命なるを天地ハ大父母なるを天和のハ父母
天地あきらくなくい天道既よ今日此日を命まそ或ハ
勤労せしめ或ハ安楽せしむなよ日ときらく愛を須と
いふなるあし凡人ハ貧賤なる時ハ憂苦し富貴なる時
ハ逸楽凡生に日を空して愛まれきとを不知目前
乃利を心ろして千載の功とたもる君子ハ貧賤なる
時も勤学し富貴なる時ハ人を愛れ日月上よ趣て
敢体下よ衰へ忽然として万物と遷化すと人生は

將くして寸陰を重んする者ハ寸そよ時よ及ひさるもの
ことを悲まさるなり

一来書略天下をとらしむるまて倍語まてハや関せる
くハ有といひてたかやかよはハ如何

返書略徳をもつて天下をおさむとも有といひ力をもつて天下
よ主となれを取ともいふ王代ハ有といへ武家ハ取をもつて有
となくハきこと也兵書よ云無取於民者取民者也
無取於國者取國者也無取於天下者取天下者
也無取民者民利之無取國者國利之無取天下
者天下利之といふりしの意まてハいへん取の字もくる
しからさるなり

一来書略家えよ仕官するとも礼せさるまし礼せさる事

有之候今ハ心得て誰をも礼不仕候言葉もくるしからすや如何
されハ彼ここそく笑てもいゝやうなる事ハ如何仕候や

返書略敬なく礼式たらさる様の人ハ何方にもあれ
ほくハ介者ハ拝せす候とて軍中まて甲冑をきくは
拝せさると礼と仕候古者國容不入軍軍容不入國
軍容入國則民徳廃と申候されハ無礼人をも拝せ
候言葉もくるしとそりもすてるなかりくせよなるとて常に
人によるたくひよ其道よ成候事を國の礼儀よ
まかせて人の徳をうしなひ治國よ礼儀なく候へハ
軍令ハ尚以行ともまいれハ亡國の基まて候是故に治
國ハ教て礼儀あることをするひしなるなり

来書略鬼門金神ハ屋をかしまするをもとめる哉

悪しきハ道理有ましきその様に覚へしハ世間に座ニ
此人分も有之ハ先主人妻子(サイシ)なともにたてとも大形も多
くハわしき方あるハ家内兎残たるつきよ家に妻
子なととめしハ鬼色心あるる様に存ハ此理分明にす
す作

返書略日本ハ福地なる故に田畠多く人多し山澤(サンタク)
迄事に應(ヲウ)しかくハ人に欲するまに座絶し木伐
こるは山林はとあるまて人民亨くはん人此
故よふし人神道の法こして三年ぬさうと合神鬼
門と忌事かある事ハ此分を堪(カン)忍まても日本國の山林と
牧畜(ボクチク)し家財を座らされ事大なるとむりし公への
いなさるとしるを法亥ハ遠まて後へ土事也と忌なる
法となるハ次るか不義(フギ)なる事ハ忠事と罰もとれあなかと
いはんや日本の水土よりて立る事とする神道乃
法なる事ハとりてそ神罰有ゆへハ神道の本ハ
義理なるて義理有て八くるしかしめくに欲
まとれよりせたく座なれハ人のしもし此國に生まれある
此國の神道とおり或ハ年来(ネンライ)悪心(アクシン)悪行なして有し者
神罰いるへきハ時とに今神鬼門の方とおりして災
害よあさる者有るくハ年来不届の者なる事こへハ小過よ
よりて罪よ行なりとも人へ道よりそ有るもとしく人の罪
をし人ニき悪人へと罰(バツ)せされしし鬼事と罰する者あり
と古人へも言われ

一 来年書略次

一 遍書略もと内より向と外より向とハ義理言語をもつて申述候ハ
無之心術の事にむかひまてハ内より向ひ無之師友も
学問仕候て吉志を滅し心術内に向ひ候外より向ひハ天
性学者も師友ともいたし候ても志を実にても心術ハ
外より向ひ候ハ是を以心傳心とも可申候書にむかひ候義
論語明の時ハかかりたる様よ候て異国も聖人ある五倫
の交ハ世俗よりもかかりて学ひ候ても用よ立かたく候
説よたかひて用ひ候て我をたひおそれ候是をれ
外に向ひ無之候まて候

一 さし当りたる急々なる事ハ義理よりて候ても若哉よる
為一まて候書を見るものも学問としてまとめとつく

なき心法失ひ無之候まて候

一 顔恒信形之事信形か身くハ奇特よ候是も道とは存
不申候いたし武士よりて一役被仰付候若ハ其役だてよ仕候
て君の善悪よりハかまひ不申候預ケ置れ候ハ或を
諫め或ハ其身を正し可行ひ思ひもよらぬまして時を
待ち第二ようべく候

一 信解を仕候ハ神主を始め仕候者よ候ハ教へ
髪を抱き法体に成り候同事よ候法師として釈を
経させ候かたくは心の誠をたてぬし候て神主と同
事ならべく候時の勢ひ順ひ可然成候

一 人々よ対して高くわたる八一宗流行の仁よあらず候
我を以て人を見候て不相叶事のこしまてよくなる

たとへば人を見ては此人も元来如此と思ひて
とがむることなくば一体の本然同じき親しみをうしなはず
して五倫共によろしかるべし天下我に同じき人のこゝろ
らも一家も立所に治るべし同じからぬ人寄合て
万事調ひ不相叶は我にまさる処なり却て
好むべし

一 存養省察は同じ工夫にてそれ存養は静中の省察
省察は動中の存養なりとこゝろに慎独受用すべし
天理の真楽其中に備はる

一 我死候とも親の遺体たる身は遺言をとくと修へ合せ
此道理との事を顧ひと義はしくりしきにありて
さ候はゞ小事にへども穿鑿に落入るべし

色は太虚天地先祖父母己子孫生断絶一貫にして人
して子孫とうくるは先祖の遺体なれば元来の身に
あらず候は生脈はなれて死候ともあらざれ時も土に合
もるといふ理としては上古の人もかゝる理にまかせ
後世の人は情によりて死候をわすれ父母の霊廟
をいとなみ死候をおさむれは己が情をはぐくむにしては己が
ま…は絶ゆるの者は情と時処の分にまかせ
はては遺言に不及事にはまた遺言せ候して不叶
ことを有るべし

一 来書略古今鬼神有無の説きは未だ明らかならず
返書略聖人神明不測との給ひは明白なる道理
までは知るとも不測の理に違せざれしや愚者は

有つし気着ハ無し次言論に及ふことあらさる深よ
く気着ハ黙識心通あるべくれ

千もやや